
学校戦争

杉谷真樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校戦争

【Nコード】

N6846G

【作者名】

杉谷真樹

【あらすじ】

平和な生活にうんざりしていた少年が言った一言で神と名乗る者が戦争の指導者になってしまった。そこから先生と生徒の部活の存続か廃止かをかけて生死をかけた本気の戦争をすることになって・・・。

第一話平和から戦争へ

1 平和から戦争へ

ああ平和だ。平和すぎる。平和っていいことなのかもしれないけど、俺にとっては退屈以外の何者でもない。

ここは都会のど真ん中。見渡す限りのビルと大きなショッピングモール。そして俺は大きなマンションに住んでいる。だが俺の通う雲之上中学校はまるで田舎だ。学校の五分の一を占める森がある。通称夢の森。由来？知らねえ。先生が決めたことだし。あとその夢の森近くには池がある鯉やカメがいる池だ。おかげで校舎が狭いってーの。校舎は北校舎に中校舎に南校舎。それは今どきフツーすぎる。まあたった一つの自慢といえば市で一番広いという南校舎から見えるこの運動場。・・・そう、それだけだ。いくら広くても端のほうにサッカーゴールが二つあるだけで特別なものが備わっているわけではない。

そして一番の問題。学校になんの騒ぎも無いこと。そう、みんな真面目ちゃん。俺が教室のガラスを割ろうと思ったくらいに何も無い。もちろんやれるわけが無かったが。なぜって俺は中学二年生。もうそろそろ進路ってやつを考えないといけない時期だから。

「ああ退屈で死にそうだあ・・・。」

俺は教室、202のガラス窓から運動場を見渡しながらつぶやいた。運動場のおくには夢の森が広がっている。桜が舞う季節。そろそろ春だ。

「おい、ユウタ。そんなに国語の時間が暇か？」

あーあ。また怒られた。国語の水野先生はすぐにボーっとしている俺を見つけてくる。

「はい。授業を聞いていなかった罰として教科書129ページから135まで読んでくれ。」

「ええ！？・・・はい。『明日をあきらめるな。未来は君たちの手の中にあるぞ。彼はそういった。僕たちはこの言葉を・・・』
なーにやってるんだ、俺は。サッカー部顧問の佐伯先生から未来のサッカー選手とまで言われている俺が何でこんなことしているんだよ。といっても最近のサッカー部は緊張感がまったく無い。昨日、三年生が卒業した。おかげでサッカー部のメンバーは急激に減り、練習しようにも人数調整が合わず、うまくいかなかったりすることが多くなった。さらに最上級の先輩がいなくなったおかげで一年生たちの緊張感がガタ落ちしている。つまり俺たちはなめられているのだ。まあそれも新一年生が入部すれば先輩としての自覚を持ち、気が引き締まるというもののだが・・・それまであと一ヶ月と一日。それまでは毎日が憂鬱な時間だ。はぁ・・・何か大きな事件でもあればいいのに。」

『・・・そして僕たちは新しい未来を手に入れたのだ。』・・・
終わった・・・。」

「はい、よろしい。さて次は・・・。」

キンコンカンコン

鐘の音だ。

「よっしゃ！給食だ！」

この教室で一番の大食いカズヤの声が俺の耳に入る。

「ユウタ、今日は一緒に食べるか？」

「ん？ごめん。今日はモミと食べるから。」

「いいなあ。ユウタにはモミみたいなかわいい彼女がいて。いいもん、おれリクと食べるから。」

そういうとカズヤはリクと食堂に向かっていった。

さてと。おれも食堂に行かないと・・・その前に。

「えっと・・・モミ！」

そう叫んだ瞬間、205の視線が俺に集中する。一部のサッカー部男子が冷やかしの目で俺を見ってくる。ああ・・・恥ずかしい。でもモミはそんな俺の気持ちなんかまったく知らず俺を見つけるとかわ

いい花柄の弁当箱をピンクの布で巻いたモミの手作り弁当を二つぶら下げて二つに縛った長い髪を揺らしながら俺のところに走ってくる。

「ユウタ！来てくれたの？ありがとう。」

「あたりまえだろ。今日はモミが俺の弁当も作ってくれたんだから。」

「うん。でもウィンナー少し焦がしちゃったんだ。ごめんね。」

「別に気にしないよ。モミの弁当なら何でもいいさ。早く行こうか。」

「うん。」

食堂でモミとご飯を食べる。この時間が一番幸せだ。なんというかモミの笑顔を見ると和むというか、とても楽しい。

俺は本当にモミのことが好きなんだなあ、ってつくづく思ったりする。相手も楽しく過ごしているみたいだから良かったなとさらに思ったりする。

でも二十分経てば元通りまた暇でつまらない学校生活の始まりだ。

まあ今日は五時間目の授業で終わりだし、雨も降ってきたからサッカー部も無い。早く帰って今日は寝ようか・・・。

「おい。ユウタ！」

「ちゃんと聞いています、上野先生。俺、理科が得意だってこと知っているでしょ。」

「まあそうだが、ボーっとしていたのは確かだろ。」

「はい。すみませんでした。」

俺は中学生。何もないまま終わる中学校生活。悲しい学校生活。平和な世の中も困ったもんだ。

『本当かい？』

もちろん。

『君はどんなことが起これば平和でないと思えるのかい？』
戦争が起きているときとか？

『戦争と平和どちらが面白い生活だと思う？』

戦争。

『じゃあ戦争を起こせば君の生活は面白くなるんだね？フッフ・・・じゃあ明日までの我慢だ。明日になれば気味の生活は面白くなるよ・・・。僕の手で。』

ありがとう。

「おいユウタ。」

「・・・。」

「おいユウタ！」

「！はい。」

「お仕置きしないと分からないのか？ボーっとするな。」

「わかりました。」

・・・なんだったんだ？今の枯れたような声は。俺の野望か？戦争・・・なんかとんでもないことを言ってしまったな。戦争なんて起さずもんじゃないよ。

そして授業が終わり、学校も終わった。後は家に帰るだけ・・・。ピンポンパンポン

『ただいまから部活の会議を始めます。新しい部長は会議室まで来て下さい。』

教室のスピーカーからそんな放送がかかった。そして俺はあいにくなことに・・・サッカー部新部長だ。ああめんどくせー。

そういえばモミもテニス部の部長だったんだっけ。まあいいか。

そんなことを考えながら俺は重い足を動かし、会議室に向かった。ガラッ

俺は会議室の扉を開ける。そこには今にも怒りそうな新部長たちがいた。

「あっ遅れました。」

「遅れましたじゃ無いわよ！どれだけ待ったと思っているの！？」
科学部部长アユミが机を叩きながら俺をにらみつけた。

「アユミさん、落ち着いて・・・ユウタ、ここだよ。」

モミが俺の民に席を取っておいてくれたらしい。本当に優しいやつ

だな。

「さてこれで全員そろったわけだ。」

俺が椅子に座るとリクの声が会議室に響いた。どうやら野球部部长のリクが今回の会議を仕切るらしい。リクは今までに無い張り切りようを見せていた。そしてその隣にいるのは美術部部长の203マナミ。こちらは書記を担当している模様。気弱な性格のマナミが人前に出て失敗しなければいいんだけど。

俺がくだらないことを考えている間にも会議は始まっているようだった。今回のテーマは最上級生としての自覚を持つ、というものらしい。

・・・あつまんねえ。

初めての会議にこの室内の空気はぴりぴりしていてもつまらないなんてつぶやける空気ではないな。そう、これがいわゆるこの学校特有の真面目な空気。ああ、なんだか俺までおかしくなりそうだ。

「さて次は・・・そうだなユウタ、なんか意見くれ。」

リクが突然俺にふる。なんだよ。イジメか。

「えー・・・。服装を整えるとか。」

クスクス。

どこかから笑い声が聞こえた。俺が不思議そうな顔をしているとモミが横でささやく。

「ユウタ、今は幽霊部員の増加についてだよ・・・。」

え、マジ？

「へっ、ユウタの意見却下。」

「悪かったな、話聞いてなくて。」

また笑い声が聞こえた。

「ユウタ、意見をくれなかったからこのレポート先生に出しといて。」

「

「・・・わかったよ。」

俺がしぶしぶ承諾するとリクは一枚の紙を俺に渡した。えっとなにかかいてあるのかな・・・。

メンバー紹介。

あとは白紙。

俺が書くのかよ。めんどくせえ。

俺はカバンからシャープペンシルを取り出し、このリクが俺に押し付けてきた紙に部長を書いていく。

えっとまずは、野球部部长、202リク。バスケットボール部部长、204アズサ。サッカー部部长、202ユウタ。剣道部部长、201ヒロタカことヒロ。ラグビー部部长、202カズヤ。テニス部部长、205モミ。卓球部部长206、ケンタロウことケン。水泳部部长、204タクヤ。科学部部长、201アユミ。合唱部部长、ミキ。美術部部长、203マナミ。吹奏楽部部长、206サキ。コンピュータ部部长、204スバル。全13種類。完成した。俺の努力の結晶だ。

「結論、一人一人が自覚を持ち、しっかりと下級生の手本になる。それが最上級生のあり方だ。」

「異議なし。」

「こ、これで会議を終わります。」

よっしゃ。会議も終わったことだし、帰るか。

「モミ、一緒に帰るか？」

「ごめん。今日はサキと帰るから。バイバイ、また明日学校でね。」
・・・ちえ。

「やーい！ふられてやんの。」

「お前らは小学生かよ。」

ああ・・・。早く先生に提出しないと。

俺はさっきの紙を部活全体が一番偉い人、山村に提出した後一人で寂しく家に帰った。ひどいやつらだ。俺に押し付けといてリクまで帰ったんだから。

今日も何も起こらず平和な一日が終わった。平和で、平和で、すべてを壊したくなるような平和な毎日が終わっていくのだろう。きつと明日も、明後日も・・・。

次の日になった。

何かが変わるわけではない。だが俺は期待に胸を膨らませながら学校に向かった。なぜかといわれると困る。俺もわからない。おそらく昨日の言葉を気にしているのだろう。戦争なんて起こるはずが無いが。

そして俺は珍しく鼻歌でも歌いながら中学校へ着いた。そして学校の正門を超えようとする。

『フフフ……。ユウタ君、今日の午後だよ。楽しみにしていてね。』

俺は思わず後ろを振り返る。通り過ぎる生徒の姿。笑顔で挨拶する先生の声。俺にだけ聞こえた幻聴はむなくも周りの音にかき消されていった。

戦争……。？ありえない。絶対ありえない。でももし……。もし本当に起こったら？もしこの学校が火の海にでもなったら……。怖い。吐き気がした。今日はこのまま帰ろうか？

「ユウタ、おはよう！」
！？

「モミ……。」

俺はこの言葉を境に気を失った。

俺が目覚めたのは暖かい布団の中だった。ここは保健室。真っ白な平和な時間が流れていた。清潔という言葉が一番似合う部屋だ。

ははは……。俺はバカだ。ありえない幻聴を聞いて、ありえないことを想像して。勝手に倒れて、保健室に運ばれて。なーにやってんだよ。

俺はそう思いながらも時計を見る。11時50分。後十分か……。

「あらユウタ君起きたのね。」

「……。迷惑掛けました。」

「いいのよ。熱も無いみたいだし、ご両親には連絡してないけど、どうする？」

「大丈夫です。このまま午後の授業に出ます。」

保健室の富田先生の優しい声で癒される。

「そう。じゃあまた体調が悪くなったらすぐに来てね。」

「はい。」

俺は保健室の扉を閉め、202の教室へ向かう。えーっといまは三時間目だから・・・数学か。日村先生の授業・・・。楽しみにしていたのに。あのナイスボディ・・・。ああダメだ。真顔で入らないと。

ガラガラ

俺は教室の扉を開ける。みんなの視線が俺に集まった。

「あら、ユウタ君無事生還したみたいね。」

「すみませんでした。」

「なぜ謝るのかしら。さあ、席について。」

俺は自分の席の椅子を引いた。

『おい、誰だお前は！？今すぐ出て行きなさ・・・』

スピーカーから声が聞こえた。みんなはスピーカーのほうへ耳を傾ける。

俺は時計を確認した。・・・12時ジャスト。まさか・・・。

『緊急放送です。今からすべての部活を廃止します』

「は！？」

クラスの全員いや学校中のすべての人が叫んだだろう。どうやら先生が決めたことではないらしい。日村先生まで目を丸くして放送に食い入っている。

そしてまた放送が入った。

『やあやあ諸君。私は神だ。みんなの願いをかなえる神様だよ。さあみんな今から戦争を始めようではないか。先生と生徒、部活の存廃をかけた戦争だよ。戦争でこのつまらない学校生活をより面白いものにして行こうではないか。フフフ・・・さあ開会式を始めよう。運動場に集まってくれたまえ。忠告だよ、神に逆らえば・・・天罰が下る。』

幻聴の枯れた声だった。

うそだろ？ありえるかよ。これも俺だけに聞こえた幻聴だよな・・・？

教室がざわついている。あの真面目な学校とは思えないくらいざわついている。

「戦争・・・？」

「運動場に行かなくていいの？」

「今のは誰？」

「部活の廃止？」

そんな言葉が飛び交っている。

「みんな、落ち着いて。きっと何かの間違いよ。不審者が侵入してきただけだわ。もうすぐ警備員が捕まえてくれるわよ。」

そうだよな。不審者が侵入したんだ。もうすぐ捕まえてくれる人が現れるはずだ。ほら、もうすぐ・・・。

「うわーっ！」

叫び声が聞こえた。日村先生が廊下を確認する。俺には日村先生の顔が青ざめていくのが分かった。その様子から何が起きているのかも想像できた。

「ユウタ・・・。今の叫び声はいつたい・・・？」

カズヤが真っ青な顔で俺を見てくる。

「・・・警備員が・・・襲われた。いや、あの青ざめようからすると・・・殺されたな。」

「ええ！？うそでしょ。ユウタ確かめよう。」

カズヤと日村先生とは逆の扉を開けて廊下を確認した。そこには、血まみれの警備員の服を着た人が倒れていた。

「うわ！？」

カズヤは思わず後ろに倒れこむ。その叫び声を聞き、二年生の教室から生徒たちが出てくる。

「きゃあっ！！」

叫びだす女子に倒れだす男子たち。そして一人の生徒が二年生の教室中に聞こえる声で叫んだ。

「神だあ!!!!!! 神の天罰だ!」

その言葉に一瞬誰も言葉を発することが出来なくなった。だがすぐにまた一人の生徒が言った。

「運動場に・・・運動場に行かないと!!」

一言そういうとその生徒は土間まで走りだした。

「うわー。」

漠然とした空気の中、ふと我に返ったようにいっせいに生徒たちが土間まで走っていった。

「ユウタ! 大丈夫? 今は土間まで走らないと。」

すれ違ったモミも俺を残して走り去っていった。怖かったのだろう。唇が震えていた。

二年生が運動場に集まっていく姿が教室から見えた。どうやら校舎にいる二年生は俺だけのようだった。

「日村先生! あの放送を信じ込ませるつもりですか。」

3階から一年の英語を担当する速水先生が出てきた。ちなみに二年生の校舎は二階だ。

「速水先生・・・あれを・・・。」

「!？」

速水先生は警備員の亡骸を見た瞬間突然バランスを失い、階段から落ちそうになった。手すりを持っていたことが不幸中の幸いで、もし階段から落ちていたら警備員の血を踏んでいただろう。

速水先生はすぐに階段を駆け上がり、この二階にまで聞こえる声で叫んだ。

「みんな、いますぐ運動場に出て! 校舎は危険よ!」

一年のざわつく声。そして一人の女子が叫びだし、それに続いて階段を駆け下りる音が聞こえた。

「ほら君も運動場に行つて。」

次々に降りていく一年生たちに一人交じり、俺も階段を降りていった。

そして運動場。

こんなときでも室長は人数を確認していた。

「ユウタ遅いぞ。神とか言うやつに殺されたのかと思ったぜ。」

「縁起でもないこと言うなよ。」

「でも室長として、心配はしたんだぜ。」

そう言ってくる怖がりで有名な202の室長のリュウイチ、通称リユウは俺に話しかけることで冷静さを保っているようだった。

やがて一年生や先生も運動場に集まったところで騒がしい雰囲気は妙な静けさになった。すべての生徒の視線が運動場の指令台に集まる。

コツコツ

ゆっくりと指令台に上ってくる人影が見えた。

校長先生だろうか。それともあの神なのだろうか。

そして指令台に上ってきた人の全身像が見えた。あれは人間だ。神ではない。だが・・・校長先生でも他の先生でも生徒でもない。というよりも顔が分からなかった。

黒い布で顔と体の半分を覆い、顔や体型、ましてや性別さえも分からなかった。

「私は神だ。この学校・・・いや世界を支配する神だ。」

変声機で声を変えている。

「さあ諸君。この平和でつまらない毎日を戦争というゲームで楽しもうではないか。」

しばらくの沈黙。神と名乗る“人”はこちらの返答を待っている様子だったがこちらは賛成も反対もしない。神はフツと笑うと言った。

「・・・私は神ではないと思っているな・・・？フッフ。私は何でもできる。この先生を操ることもね・・・。」

生徒たちがざわつき始めた。そこで一人の生徒が声を上げる。

「じゃあやってみろよ！」

また神はフツと笑うと人差し指を天高く上に上げた。

運動場は騒然とする。何が起こるのかまったく見当もつかなかった。

本当に先生たちは操られてしまうのか・・・それともこのまま泣いて土下座か。

そう考えているうちに神は何も起こさず手を下ろした。生徒の全員が泣いて謝るのだと思っただろう。すると神は足早に指令台を降りていった。その代わりに一人の線背が指令台に上ってきた。サッカー部顧問の佐伯先生だった。

「先生・・・？」

一年のサッカー部は不安そうな声を上げる。俺はただ呆然と佐伯先生を見ていた。ただ操られていないことを願って。

「みんな。聞いてくれ。」

佐伯先生が口を開いた。

「重大発表だ。」

運動場全体に緊張感が走る。

「今すぐに、全部活を廃止する！」

一瞬の沈黙。やはりこうなってしまうのか。

これはもともと決まっていたことで発表したのかそれとも・・・。突然神が指令台の横に立ち、高らかに笑った。俺たちをあざ笑うかのように。そして一言言い放った。

「これが私の力だ！！」

そして後ろを振り向き、笑いながらこの学校の正門を去っていった。生徒は思っただろう。しょぼすぎると。ありえないと。そしてあいつはなんだったのかと。

俺は神を見送った後佐伯先生に注目した。そして問題の一言をもう一度思い返した。

『今すぐに全部活を廃止する』

まだ言っていなかっただろう。この学校の生徒は強制されているわけでもないのに全員が部活に入っているのだ。

この学校の生徒にとって部活は一種の生きがいだろう。それを廃止されると聞いて黙っているはずが無かった。

「いやです！」

「部活を廃止しないで！」

さまざまな非難の声が指令台の佐伯先生に向かって飛び交った。そんな中、佐伯先生は神に似たフツという笑いをみせ、驚愕の一言をいう。

「部活を廃止する。この意見に一人でも逆らった場合・・・私たちは宣戦布告をしよう。つまり、部活をやめるかやるか戦争をやるうではないか。」

生徒たちが目を丸くする。

神の真の目的はこういうことだったのか。

しばらくは何も意見が出なかった。不安のため泣き出す生徒まで出てきた。そんな中おれの後ろにいたリクが声を上げた。

「それでも、部活は続けたい！」

その一言がきっかけで次々にそれぞれの部長が声を上げた。

「美術部はこれから入学式の看板を作らないといけないから・・・ダメです。」

「そうよ！バスケットボール部の一年はこれから大会があるんだから！」

「そうだそうだ！」

部長だけでなくいろいろな人の声が飛び交うようになった。

「では・・・戦争をするのだな？」

この一言にもう一度運動場が静まり返る。この沈黙を破ったのはサッカー部の一年生だった。

「部長！僕たちは去年の三年生が大会で負けたとき泣きながら部長に来年は必ず勝つことを約束していたのを知っています。」

「その約束を破らないでください！」

「俺たちサッカーやりたいです。」

・・・お前ら・・・。そんなにサッカーがやりたかったとは知らなかった。やる気をなくしていたからもうサッカーには興味がなくなっただけかと思っていた。

「おい部長、こうなったらお前が決めないといけないみたいだぜ。」

戦争をやるか、部活をやめるか。」

後ろからリクが俺の背中を本当に押してきやがった。
でも・・・ありがとう。これで踏ん切りがついた。

俺は大声で叫んだ。

「俺たちは部活をやりたいです。やり続けます！だから戦争もやり
ます。これは戦争の開会式の宣言だ！」

「おー！！」

誰も反対する人はいなかった。空を見たら、白い鳥が急いでこの学
校を飛び立っている姿が見えた。

第二話作戦会議

2 作戦会議

「では、明日、戦争を始める。」

そういう残し、佐伯先生は指令台を降りていった。そして佐伯先生
の後に続き、他の先生も職員室へ帰っていった。

そして生徒も解散。それぞれの教室へ戻って待機。そんな命令が生
徒会長の205シンから下された。

そして俺はゆっくりと教室へ帰っていた。その途中、ようやく俺は
大変なことをしてしまったことに気がついた。

俺はいったいなんてことをしてしまったんだ。戦争なんて望んでい
なかったはずなのに。部活が廃止になって戦争を行わなくてすむの
ならそれでいいと思っていたのに。一年のやる気に魅せられて思わ
ずあんなことを・・・！

俺は一人、絶望した。

教室に入るとみんな俺が俺をほめてくれた。戦争は怖いけどがんば
ろうね、とかお前は正しいよ、とか。

俺は少しだけその言葉にたち救われた。

「ユウタ。」

名前を呼ばれて後ろを振り向くとカズヤがいた。

「ユウタはどう思っているの？」

「俺は・・・少し後悔している。」

「だったら今すぐに校長先生に謝りに行こうよ。僕も着いていくか
ら。部活のことは戦争じゃなくて話し合いで決めるように説得しよ
う。」

カズヤは戦争には反対らしい。

俺はカズヤの意見にうなずくと職員室へ向かった。

「失礼します。」

そういうながらカズヤと職員室の中へ入っていく。

コーヒーとタバコの香りが入り混じった部屋からは緊迫した空気が流れていた。

・・・そうだ。この人たちは操られているんだ・・・。

俺は改めてそう思った。どんなに真剣な会議も生徒が来れば空気はやわらかく流れていった。だが今はそうではない。きりつとした目でこちらをにらんでくる。

「・・・何だ。」

「校長先生はいませんか？」

「今はシカゴにバカンスへ行っている。」

は？ふざけるなよ。こんなときに何やっているんだよ校長は！

「じゃあ・・・。この際全員の先生に聞いてもらおう。」

カズヤはゆつくりと頷く。

「えっと・・・さっきはすみませんでした。戦争は取りやめてください。」

「却下だ。」

「一回話し合いましょう。そうすればいい答えも・・・」

「出て行け。」

「でも・・・。」

その瞬間、二年の体育の男子を担当している三谷先生が俺の前に立ちはだかった。

「出て行け。」

そういうと俺とカズヤを突き飛ばし、思いっきり職員室のドアを閉めた。

「・・・交渉決裂か・・・。」

俺は横目でカズヤを見る。真っ青な顔をして怯えているようだった。

「いやだぁ・・・。いやだ！僕は死にたくない！戦争なんていやだ

！僕、明日から学校来ない！」

そう言いながらカズヤは正門に向かって走っていった。

「おい、ちょっと待てよ。」

これは俺が決めてしまったことだ。ちゃんとカズヤに謝ってからにしないと・・・。

俺はカズヤの姿が見えているうちに追い和也を追いかけることにした。

さすがラグビー部だ。足の速さが桁違いだ。俺もサッカー部だけど・・・俺はキーパーをやっているからあまり足は速いほうではない。よし、カズヤは正門の前で止まっている。追いつける。

「はぁ、はぁ・・・。カズヤ、俺お前に謝らないと・・・。」

俺は頭を下げた。

「ユウタ・・・。」

「ゴメン。」

「ユウタ・・・。」

「・・・本当にゴメン。」

「ユウタ・・・!」

「なんだよ。」

さすがに俺も頭を上げる。するとそこには信じられない景色が広がっていた。

そう、ここは正門の前。そこには外の景色が広がっている・・・はずだった。だが今日の前に広がっているのはただ紫色だけ。外など無い、ただの紫色。

「僕・・・出るよ。戦争よりは紫色の世界のほうがましだ!」

「ちよっ! 落ち着けよカズヤ。」

「うわー!」

そう言いながらカズヤは紫の世界に飛び込もうとした。が、飛び込むことが出来ず小跳ね返されてしまった。

「どういうこと・・・?」

俺は紫色の世界に手を入れようとした。だが手を入れることは出来ず、跳ね返された。・・・というよりも弾力があり、世界というよりは固体という表現のほうが近いようだった。

「ユウタ! どういうことなの? ユウタが戦争を起こしたんでしょ!

？だったら分かるよね？教えてよ！何で僕はこの学校から出られないの！？」

学校から出られない・・・。

うそだろ？俺たち学校に閉じ込められたってことかよ。

「ユウタ、答えてよ！！」

「落ち着けよカズヤ。後ですごく恨んでいいから今は冷静になれよ！」

「！・・・ゴメン。ユウタだけのせいじゃないよね・・・。」

「・・・けど・・・。学校から出られなくなったとなると・・・。」
きつと学校中が騒ぎ出さだろう。それだけは抑えたいものだけど・・・。

ピンポンパンポン

『えー。今から作戦会議を始めます。各部活の部長は会議室まで集まって下さい。』

外にまで聞こえる放送がかかった。先生たちにこちらの動きを教えたりしてよかったのかな？

「ユウタ。僕はユウタのことを恨んだりはいしないよ。だから早く会議室に行こう。」

俺は頷くとカズヤの後ろに付いて、会議室へ向かった。

会議室の中へ入ると俺とカズヤ以外の席は埋まっている状態だった。

「これで全員そろったようだね。」

会長のシンと秘書で201のナナエが俺たちを席に着くよう進める。ちなみに俺の隣の席にはモミも座っていた。俺たちが席に着いたところで会長が話し始める。会議が始まったのだ。

「さて。今座ってもらったユウタ君の爆弾発言によって戦争が明日始まることになった。これは僕たち全員が予想していなかったことだろう。」

「・・・すみません。」

「いや、僕たちは君の事を攻めているわけではないのだよ、ユウタ君。きつと君が言わなくても僕らの誰かが言っていたに違いないか

らね。その証拠に誰も戦争に反対をしていないからね。」

「私のがんばるよ。」

隣でモミが俺を氣遣ってくれる。女性に氣遣ってもらうなんて少し恥ずかしかった。でもモミが反対していいことに少し安心した。

「戦争をやるからには必ず僕たちは勝利を手にしなければならぬ。そこで・・・ある人物を呼んでおいた。さあ入りたまえ。」

ガラガラ

ドアを開けて入ってきた一人の女性・・・髪が腰にまでついている超ロングヘアーで目はつりめで吸い込まれそうな漆黒。なんとうか・・・氣品あふれる氣が強いお嬢様のような感じがした。クラスバッチは201と書いてあったが見かけない顔だった。

「彼女はいい・・・。」

「彼女は作戦さんだ。」

「作戦さん？なんだよその名前。」

「昨日、201のクラスに転校生が来る予定だった。そうだよね？ナナエ君。」

ナナエこと秘書は一冊のノートを取り出し、話し始めた。

「はい。彼女は雲之上中学校に201に転校してくる予定であった作戦さんです。彼女は今日の午前中に紹介される予定であったのですが都合のため午後に紹介することになったそうです。そして彼女が学校に着いたときにはもう運動場に人が集まっており、彼女は後ろで隠れながら話をきいていたそうです。以上、報告完了です。」

「説明ありがとう。」

そう一言作戦さんと呼ばれる人は言った。そしてこう続けた。

「でもひとつ間違っていることがあります。」

「す、すみません。」

「いえ、たいしたことではありませんから。ただ私は隠れてなどいませんでした。指令代の後ろで堂々と立っていました。先生方にも何も言われなかったから、てっきりいいのかと思ったので。」

「そうでしたか。」

いつもは気が強い秘書も作戦さんの前ではたじたじだった。

「で？作戦さんの本名は何だよ。」

剣道部部長のヒロが立ち上がった。

「あなたは・・・ヒロさんというお方でしたね。」

「まあそうだけど。」

「女性のことをあなた何も分かってないのね。」

「うっ・・・。」

ちなみにヒロは以前、女心を分かっていないという理由で振られた経験が三回ほどある。そういえばつい先日と同じ理由で振られたって聞いていたから4回に渡る失敗をしたってわけだ。だから今のヒロには作戦さんの言葉は大きく心にひびが入っただろう。

ヒロは弱弱しく座ってしまった。

・・・でも俺も本名知りたいんだけど・・・。

「本名のことはおいておくとして、あんたがその名前を名乗っているのなら作戦を考えてきているんだよね？」

「もちろんです。ほらこのとおり、学校の見取り図を書いてきました。これを使って説明していきます。」

作戦さんは学校の見取り図を広げた。俺たちはその見取り図に注目する。が、教室が分けられているだけでどこがどれなのかがまったく分からない状況であった。

「・・・すみません。私この学校のことあまり知らないから・・・皆様で教えてくれませんか？」

「しょうがねえな・・・。まず南校舎の一階は三年生の教室だ。今は卒業して誰もいないけど。二階は二年生の教室。三階は一年生の教室。それぞれ六組まである。次に中校舎。一階には西に保健室、東に食堂。あつ、保健室の隣にあるこの狭いスペースは吹奏楽部の部室だ。二階には東から順番に理科室、技術室、美術室、コンピュータ室・三階には東から音楽室、家庭科室、そして今俺たちがいる会議室だ。えっと北校舎には一階が職員室と校長室、二階が東に職員会議室、西に保護者会議室。三階は倉庫と屋上へ続く階段だ。え

つと各廊下についている狭いスペースはトイレだ。」

「あと、校舎全体は一階の東側にあるこの通路でつながっていて、通路の行き着く先は、ここ、第一体育館。主にバスケットボールとバレーボールをやっている場所で、その奥にある少し小さいやつが第二体育館。マット運動や、剣道、卓球も行ったりするのよ。」

「そしてこの大きな面積がわが校自慢の運動場です。もうひとつのこの広い面積はテニスコートです。あ、ちなみに各校舎の一階にはそれぞれ土間が在って、北校舎からは少し遠いけど直接外に出ることが出来るのです。そうです、その部分です」

俺とサキとスバルが説明してなんとか見取り図が完成した。

「ご協力ありがとうございます。」

「さて、本題に入りましょう。」

「そうですね。まず、各部活の部長さんを集めたのは他でもない、それぞれの部活に別れて作戦を実行しようと思うからです。」

「それぞれの部活で？」

「はい。まず、ユウタ君とカズヤ君ですか？先ほど見てきたことを話してもらわないと。」

俺と和也は顔を見合わせた。

「ここからはあの正門、何の変哲も無いけど、近くから見ると紫色のバリアみたいなのやつで覆われていて・・・この学校から出ることができなくなっていた。」

「!？」

皆驚いている様子だった。

「ありがとう。つまり、先生も私たちも学校にあるものでしか攻撃できないのです。」

「なるほど・・・。」

「そこでそれぞれの部活の特色を生かして攻撃していこうかと思えます。」

まず近距離戦はラグビー部と剣道部でしょうね。ラグビー部は体当たりというのですかそれでアタックの攻撃をする。剣道部は剣術で

攻撃をするといった形で宜しく願います。」

中距離戦はサッカー部、テニス部、卓球部、バスケットボール部といった球技系統の部活です。着かず離れず野場所からボールを当てていきます。

遠距離戦は野球部ですね。銃ではありませんが、援護射撃というものをお願いします。球技の中でも一番遠くに飛ばすことが出来て、敵とあまり接近しないので要の役割を果たすことになると思いますから部長のリク君、しっかりと願います。」

「はい！」

「次は文化部の役割です。まず科学部と水泳部は薬の研究を行ってください。」

「え！？私たち顧問の上野先生からそんなこと一度も教わったこと無いよ！」

科学部部長のアユミが不安そうな顔をしながら立ち上がった。

「でも理科室にはさまざまな薬品があるのでから利用していかないと。」

「・・・わかったわ。頑張ってみる。」

アユミはうつむいたままその場に座った。

「水泳部ですか？というより文化部じゃないし。」

水泳部部長のタクヤが不満そうに口を尖らせた。

「プールには塩素が含まれているでしょう！」

「は、はぁ・・・。」

タクヤは気迫で無理やり納得させられたようだ。実際は何の理由に間なっていないと思うのだが。

「次は合唱部と吹奏楽部。吹奏楽部は楽器で先生を殴ってもらいたいけれど・・・。」

「それはダメです！楽器は壊れてしまったらとてもお金がかかるし、何よりも吹奏楽部にとっては命ですから。」

普段はあまり怒らないサキが珍しく声を荒立てた。

「そういうと思いました。だからあなたたちは剣道部に交じって近

距離で先生方と戦ってもらいたいと思います。」

「でも、私たちそんなこと・・・。」

「大丈夫です。剣道には特別なルールがあるけれどあなたたちはただ剣を振り回しているだけでいいのです。戦争にはそのようなことを気にしている場合ではないですからね。」

「・・・やれるだけのことはやってみます。」

サキが横を向きながらつぶやいた。

「合唱部は主に負傷者の治療に当たってください。これはとても大事な役割です。がんばってください。」

「はい、がんばります。」

ミキが優しい笑顔で言った。

「次に美術部。確か美術室にはいろいろなものがおいてありましょね？」

「あ、はい。紙や石膏像や大きな木片にイーゼル、絵の具や筆にデザインカッター・・・あ、電動のこぎりや紙を直線に切るための道具やプレス機、なんかもありますよ。」

マナミの顔が輝いていた。どうやら美術の話題になると目がきらきらと輝くようだ。

「ありがとうございます。それだけあれば武器の製造も何とかなるよね？」

「・・・武器・・・ですか？」

「ええ。ボールが無くても軽くて硬いものであれば代用できますが、剣道で使っている・・・竹刀ですか？それはおそらくすぐに足りなくなってしまうでしょう。吹奏楽部と共同で使うわけですから。」

「でも・・・出来るでしょうか・・・。」

「やってみなくてはわからないでしょう。何事も挑戦です。」

「！わかりました。」

「最後にコンピュータ部。言ってみればこの部活が一番重要となるかもしれません。」

部長であるスバルのメガネの奥の瞳からは真剣の表情が読み取れた。「大体の学校のコンピュータにはその学校の情報というものがデー

タとして入っていると思います。そのデータを読み取り、秘書に報告をするというのが仕事です。なお、その情報は作戦に加えられるから、くれぐれも間違った情報は伝えないように。」

「はい！」

「以上。私からはもう何も言うことはありません。」

作戦さんは一通り話し終わると力が抜けたように椅子に座り込んでしまった。そして会長に何かを目で合図すると足を組みながら俺たちの様子を伺っているようだった。

「じゃあ僕、早速準備に取り掛かるよ。」

そういいながらケンが会議室を出ようとした。

「待ちたまえケン君。」

しかし会長がそれを止めた。

「なんだよ会長。」

「これからはこの学校の指揮は僕がとる。僕の言うことに従ってくれないかい？」

「・・・ちえ。わかったよ。」

ケンは会議室の扉を閉めるとふてくされたように椅子に座り込んだ。「さて諸君。これからは僕たちの時代だよ！ともにこの戦争で勝利を勝ち取ろう！」

俺たちはそれぞれ顔を見合わせた。そして笑顔で椅子から立ち上がる。

「勝利をこの手に！」

「オー！」

この会議室の中で俺たちの心はつながった。

まあ内心は会長の古すぎる演説を少しバカにしていただろうが。

「さて、君たちに指令を出す。初めに、おそらく戦いが繰り広げられるのは主に運動場と第一、第二体育館であろう。しかし体育館は建物の中だし会議室は中校舎だ。中校舎からでは運動場の様子が一切確認できないのだ。そこでどうにかしてここと運動場と連絡を取りたいのだが・・・。」

「それならご安心を。」

スバルが自信満々に俺たちより一步前に出た。

「コンピュータにはさまざまな技術が施されています。コンピュータを分解し、マイクとイヤホンを取り付ければここに集まっている人数くらいの数ならば作ることが出来るでしょう。」

「おお素晴らしい。ではスバル率いるコンピュータ部は早速その作業に取り掛かってもらおう。」

「わかりました。」

スバルは不敵な笑みを浮かべるとゆつくりと会議室を去っていった。

「この件はコンピュータ部に任せよう。次だ。明日は戦争初日だ。おそらく相手のほうも様子を見てくるだけだろう。だからといってこちらがうかつに行動すれば相手にこちらの作戦を知られることになる。こちらは相手が本格的な行動に出るまではこちらも本格的な行動には移らないことにする。」

「で？ 結局どうするんだ？」

タクヤが頭をかきながら言った。

「こちらの様子見として一番生存確率の高い野球部を送ることにする。遠距離だけでは不安だから剣道部も数人送ることにしよう。明日はそれだけでいく。野球部と剣道部、気を引き締めるように。」

「はい。」

「では他の部活はそれぞれの練習や作戦さんに言われたことをするように。」

「はい！」

「では終了！」

それぞれの部長が一斉に会議室から出て行った。静まり返った会議室の中で部長の中では俺とモミだけが取り残された。

「俺たちも行くか。」

俺たちは会議室を出ようとした。

「ユウタ君、モミさんお待ちください。」

俺たちは秘書に名前を呼ばれ、振り返った。秘書の行動が分からない

かったのだろう。会長と作戦さんは顔を見合わせ、不思議そうな顔をいていた。それでも会長は余裕の表情を見せ、メガネの曇りをふき取りながら言った。

「どうしたのだねナナエ君。」

秘書はメガネをかけ治すとノートを開きながら言った。

「食料の問題なのですが・・・ユウタ君とモミさん食堂を確認してきてください。もしかしたら在庫があるかもしれません。」

「わかりました。行こう、ユウタ。」

「あ、ああ。」

俺はモミに手を引かれて廊下へ出た。今までモミが俺の手を引くなんてあっただろうか。モミの様子に俺は少し戸惑い、急に不安が俺を襲った。モミが振り返るとそこにはいつもの優しい笑顔が無かった。モミは俺に表情を見せないようにうつむいていた。

「ユウタ・・・。怖いよ・・・。」

声が震えていた。泣いているのだろう。

「ゴメン・・・。」

「違うの！戦争を起こしてでも部活を廃止させたくない。この気持ちは確かなの。でも・・・怖い。体が震える。会議中ずっと我慢していたけれども限界だよ・・・。」

モミはなるべく声を出さずに泣いていた。それでも涙をすする声は廊下中に響き渡り、むなしくも消えていった。俺は何も声を掛けてあげることができず、ただそばにいたことしか出来なかった。ただそばにいて、見守ることしか・・・。

「ありがとう・・・。」

モミがつぶやいた言葉の意味は今の俺には分からなかった。

モミが泣き止むと俺たちはすぐにその場を離れた。おそらくモミの声は会議室にも聞こえていたと思うから。そして今俺たちは食堂の横の狭いスペースにある調理場に来ている。ちなみにこの学校は週一回にランチというこの学校から支給される昼食がある。・・・つまり給食だ。

そのランチというのは本当ならば明日のはずだった。が、学校から出られないとなるとおそらく入ることも出来ないであろう。つまり調理員さんは入ってこられないのだ。つまり、食料は俺たちが独り占めってこと。

予想どおり、調理場にはたくさんの野菜、肉、魚があった。全校生徒分だ。ものすごい量だった。さらに明日は近所の小学六年生たちが一日だけランチを体験しに来る予定でもあったため、さらにすごい量になっていた。

「これだけあれば平気だね。」

モミが安心したような表情を見せた。この顔を見てると俺まで安心する。

「さてと・・・戻るか。」

俺たちは後ろを振り向いた。

すると突然ゆらゆらと黒い影が揺れた。そして食堂の方向へと消えていった。人影だったであろうか。いや違う・・・。耳が横ではなくて上についていた。何かの動物だろう。

「ユウタ・・・今の見た？」

「ああ。人ではなかったみたいだけど。」

「追いかけてみる？」

「そうだな。」

モミは満面の笑みで俺の手を引いた。

ちなみにモミは無類のテニスと動物好きだ。

そして俺はモミに手を引かれ、すごい勢いに目を回し、急なカーブに対応することが出来ずに流し台の角に足をぶつけ、食堂まで来た。ここまでくるのに全速力で走る必要があったのかよ？

「あれ？誰もいないね。」

「どこかに隠れているとか？」

「よし、探そう！」

ああ、こうなったモミをとめるには動物を見つけるかそのほかにもっと大きな事件が起こるほか方法が無い。

「おい！出てきて！」

「おい。出て来いよ。」

モミのやけに明るい声に交じって俺も声をだしながら必死に探した。この作業を終えるためにも。

三十分は探したのであろう。しかしいまだになぞの生物は見当たらない。俺は疲れきった表情でモミを見た。いまだに目を輝かせながら探していた。まるで獲物を狙うライオンのように。

・・・あきらめるつもりはないのかよ。

「モミ、そろそろやめな・・・。」

「いた！」

「へ？」

「ほら、いたんだよかわいい子猫！」

もみの手のなかには小さな真っ白の子猫がいた。

「・・・野良猫が紛れ込んでいたのか？」

「戦争に巻き込まれたらかわいそう。ねえユウタ、会長さんたちにお願ひしてこの子猫預かってもらおうよ。」

「そうだな。子猫一匹じゃ何も出来ないだろうし。」

「じゃあ報告に行こう！」

モミは子猫に顔を摺り寄せながら廊下をスキップで進んでいた。

あんなに喜んだモミを見るのは初めてだ・・・。

俺は少しむっとした。

でもさっきの影・・・本当に猫だったのだろうか。あの猫にしてはもっと細長かった気がする。

・・・俺の考えすぎだろうか。

俺たちは会議室に入り、秘書に在庫はたっぷりあると、会長には猫のことを報告して少し会議室で休むことにした。会長は少し考えていたようだが猫がニャアと鳴くとメガネの奥の目がとろんとして即座にここにおいてくれることに賛成してくれた。

「良かったね。えっと君の名前は真っ白だからシュガーでいいかな？」

「ニャア。」

「そうか、うれしいか！」

モミは一人で猫と会話していた。やはり満面の笑みで。

それにしても名前が砂糖って……。まあべつにいいけど。

さて、俺もサッカーの練習をしにいくか……。

俺が椅子から立ち上がると会長が待ちたまえと一言。

「なんですか？」

「君に新しい指令を出したいと思う。何回もすまないね。」

「別にいいけど。」

「君は連絡係になってもらおうと思うんだ。」

会長のメガネが照明に反射してきらりと光った。

「連絡係？」

「そうだ。明日コンピュータ部から通信機が届くだろう。君には戦場に行ってもらってその通信機で僕まで連絡してくれないかい？もちろん連絡するだけだ。戦わなくていい。しかしそれを毎日行ってもらおう。」

「毎日ですか？」

「ああ。」

毎日戦場に行く……。ということはつまり戦死する可能性が高くなるということだった。

「なぜ……。僕なんですか？」

「君がこの戦争を起こした第一人者だからだよ。君の一言でこの戦争は始まった。君が戦争の責任者なのだ。だから君には戦いの様子を見てもらう必要がある。雄雄しく戦っている勇者たちの姿をね。」
「……そうだった。俺の一言でみんなを命の危険にさらしているんだ。俺が死を怖がってどうするのだ。俺には戦いを見届ける必要がある。……そうかもしれない。」

「分かりました。連絡係、精一杯やりたいと思います。」

「そうか！ありがとう。君ならやれるよ絶対。」

「はい。」

その様子を見ていた作戦さんが俺に向かって一言言った。

「あなただけは死なないように。」

その言葉はどういう意味だったのだろうか。深くは追求してはいけない気がして俺は何も言えなかった。

「さあ、サッカー部！お前たちが俺を乗せたからこの戦争が始まったんだ。お前たちはよりいっそうがんばるように。」

「はい！」

会議室から移動し、ここは運動場。俺は部員に作戦を説明し、練習につかせた。俺もボールを出してきて、練習に励んだ。

「ゴール！」

「さすが部長・・・久しぶりにすごいシュートですね。キーパーだからシュートはあまり得意じゃないと思っていました。」

俺が久しぶりに決めたシュートにみんなが唖然としていた。

そんなに俺、ボール蹴っていなかったか。まあこれくらい打てないと部長にはなれなかったと思うし。

そんな俺の姿を見てサッカー部に以前の緊張感が戻ってきた。けりにも力が入っている。いい感じだ。やっぱ、部長の姿を見て部員は成長していくんだなあ・・・。

「浮かれているんじゃないよ。」

運動場のもう半分を使っていた野球部の部長、つまりリクが俺の頭にボールを命中させた。ボール自体はすぐやわらかかったが痛かった。

「おお・・・さすが部長。すばらしい命中率。」

野球部が感心している。リクは明らかに調子に乗っていた。

「いってー！てめえお返しだ！」

俺はサッカーボールをリクに向かって蹴る。ボールは見事リクに命中し、リクは後ろに倒れていた。

「ははは・・・。そうこなくっちゃ。よし、いつものユウタだ。」

「へ？」

「おお、最近暇そうにしていたし、今日も戦争を起こしたことで責

任感じていただろ。お前はすぐに調子に乗って挑発にも乗ってモミにぞっこんラブじゃなきゃな。」

そうか。俺、周りから心配されるほどにおかしかったのか。

「・・・最後がおかしかった気がするが・・・。リク、ありがとう。」

「いいってことよ。お前連絡係で戦場にくるんだろ？俺の勇姿、しっかりと報告してくれよ。」

「そうだな。」

俺たちはしばらく雑談を交わした後、また部活の練習に励んだ。

正直少し安心した。俺は少しあせっていただけだったんだ。受験とか、恋とか。

「よし、後一人四十回ずつ打ったら終わりだ。」

「はい！」

太陽がなかなか沈まない明るい夕方だった。

空は赤紫色になり、少しだけ星が輝いていた。

・・・まさか学校で一夜を過ごすことになるとは思っても見なかった。いや、家に帰れない時点でもう覚悟はできていたけれど・・・。

「どうして教室で机に向かってうつぶせに寝なければいけないんだよ。」

「体育館で寝たら敵に襲われる可能性があるからだって言っていたよ。」

会議室でたまたま隣に座っていたミキが言った。

「納得いかないな・・・。」

俺はしぶしぶ202、俺のクラスに戻った。教室に入った瞬間妙な違和感が俺を襲った。ざわつく202・・・。はじめてみた。新しいクラスになってもまったくざわつかないクラスが今ではうるさいと感じるくらいだった。

こういう雰囲気求めていたんだよ。

俺は少しうれしくなった。

次の日だ。

なれない体制で寝ていたから首がかなり痛い。が、今日は戦争初日だ。俺も連絡係としてがんばらないと。

俺は眠たい目をこすりながら会議室へ向かった。そこではリクが作戦さんから最終の指示を受けていた。それを見つめるそのほかの部長たち。

「ユウタ君、また最後ですか。ようやく皆さん集まりましたね。」そんな皮肉を言われながらスバルに何かを渡された。まるでヘッドホンだ。

「わがコンピュータ部が誇りを掛けて作った通信機です。使い方を説明しましょう。まずヘッドホンのように頭から耳に掛ける。そしてこのマイクの高さを調整し、これで準備は完了です。」

次に通信の仕方です。右耳からマイクが出ているでしょう。このマイクの音をとるところの横にこのようにくるくる回るものが着いています。これには皆さんの名前と全員に連絡が取れるようにOLLという文字が彫ってありますからこの矢印にあわせてください。そうすればその名前の人に連絡が取れます。あっ、普段は切にしておいてくださいね。また、全員ではないですが複数に人に連絡をとりたい場合は・・・そうですね、例題を使って説明しましょうか。

僕が会長さんとヒロさんとケンさんに連絡を取りたい場合は、まず僕が会長さんに連絡を繋げる。次に会長さんがヒロさんに連絡を繋げる。次にヒロさんがケンさんに連絡を繋げる。最後にケンさんが僕に連絡を繋げる。そうすればその人たちだけに連絡が伝わる、というわけです。

以上。」

スバルの長い説明が終わった。俺たちは通信機を装着して、お互いの顔を見合わせた。

「さあ諸君。いよいよ戦争が始まるよ。僕らの部活を守るために！」

「おー！」

俺たちの意思は固かった。

第三話開戦、そして犠牲

3 開戦、そして犠牲

「ではリク君。しっかり頼みます。」

「任せておいてください。」

「ユウタ君も報告がんばって。」

「ああ。」

リクは会長に言葉を掛けてもらい、気合が入っているようだった。

・・・俺もがんばらないと。

「では、いつてらっしゃい！」

「はい！」

俺とリクは会議室を出た。

「野球部は今すぐ運動場に出る。お前は どうする？」

「ん？ 少し心の整理をつけておくよ。首痛いし。」

「意味わかんねーって」

俺とリクはこぶしとこぶしをお互いにぶつけ、がんばることを誓った。

そしてリクは足早に運動場へと向かった。

何が起るのかわからない戦場。俺にはまだ心の準備が必要だった。

「ユウタ。」

後ろでモミが俺の名前を呼んだ。

「ユウタ・・・。私ユウタが毎日戦場にいくなんて・・・そんな危険なことやるなんて知らなくて。昨日何もいえなくてごめんなさい。ユウタ、絶対に帰ってきてね。約束だからね。」

「ああ。ありがとう。」

モミのおかげかな・・・少し不安が無くなった。よし、行こう。俺は戦場ですべてを見届けないといけないのだから。

俺が運動場に着くと野球部と一部の剣道部は戦闘体制に入っていた。

しかし肝心の戦う相手がまだ来ておらず、ただ緊迫した空気が流れていた。

俺は運動場の端の花壇にまぎれて身を隠し、戦いを見ることにした。おそらくもうそろそろ一時間だろう。いまだに先生は来ない。もしかして俺たちは戦場を間違えたのでは？ そう思った瞬間、野球部の方向へと靴が飛んできた。靴が飛んできた方向には・・・二人の先生がいた。

三年体育顧問、男性の細岡先生と一年の英語を教えている女性の後藤先生だった。

「!？」

野球部と剣道部はこれを開戦の合図とみなし、それぞれバット、ボール、竹刀を構えた。

それにまったく動揺する様子を見せず、二人はゆつくりと歩いてくる。その両手には・・・レンガを持っていた。俺はふと花壇の敷居を見た。

敷居は確かレンガで出来ていたはずだ・・・。

予想通りだった。敷居のレンガは10個ほどなくなっている。

こんなので殴ったら・・・。ひとたまりも無い。相手も本気なんだろう。

いよいよ開戦か・・・。

俺も気を引き締めた。

「野球部！ バッティング練習だ。ボールがああ先生二人に当たるまでやりつづける！ おっと、剣道部に当たったものは後で腹筋500回と運動場50週だからな。」

「おっす！」

野球部がいつせいにバットを構え、ボールを打ち始めた。ピッチャーはボールを素手で投げている。

それでも二人はひるまず悠々と歩いていった。

それに比べて野球部は恐怖の表情に満ちていた。無理も無いだろう。戦争が今始まったのだから。それに人に野球ボールをぶつけるとい

うことは殺人行為にもなりかねない。・・・殺人に微塵の恐怖を感じない人もいないだろう。

「えい！」

一人の野球部員が投げたボールが細岡先生の体に当たった。

・・・野球ボールは硬いんだ。ひとたまりも無いだろう。

俺は素人ながらにそう感じた。

しかし細岡先生は表情を変えることなく歩いていった。

「なんだよあれ・・・。」

俺は小声でつぶやいた。

シュッ

突然通信機からの連絡があった。相手は会長だ。

「ユウタ君。野球部が打つボールの音は会議室まで聞こえているよ。いよいよ始まったんだね。」

「ああ。」

「どうだね？今の状況は。」

「細岡先生と後藤先生が野球部に向かって歩いている。二人とも両手にレンガを所持している。今野球部の投げたボールが細岡先生に当たったんだけど・・・。まったく効いていません。」

「そうか。これはあの神というやつの操り能力に秘密があるのだろうか・・・。」

「分からない。だがこちらは少し不利な状況になっている。それだけだ。」

「分かった。最善の策を考えよう。引き続き途中経過をまた連絡してくれ。」

「ああ。」

ブチッ

通信が切れたようだ。俺は再び視線を戦場へと向ける。

二人の先生は野球部の目の前まで来ていた。そろそろ攻撃も出来るだろう。

「剣道部始動！全力で野球部を守れ！」

「はい！」

いよいよ剣道部が直接二人を攻撃し始めた。その数は数人だったがそのほとんどが目には涙を浮かべながら戦っていた。

そうだった。細岡先生は剣道部顧問だった。

それでも剣道部部長のヒロは細野先生に向かって竹刀を振り下ろした。

バキッ

細岡先生はヒロの攻撃を腕でガードするとヒロを思いっきりにらみつけ、腕で横に振り払う。それとともにヒロの持っていた竹刀が折れていった。

「・・・まじかよ。」

部長の攻撃を腕で防ぐなんてありえないことだった。顧問としてヒロも手加減をしまっていたのかもしれないがだったら竹刀が折れることは無かっただろう。

「あの腕は鋼鉄かよ。」

本当にそう感じさせる勢いだった。

そんな光景を見ている間に後藤先生が攻撃に入っていた。あんなに近くにいるのに野球部の球はなかなか先生たちには当たらない。

「うわー！」

一人の野球部員があきらめたように持っていたバットを落とし、恐怖で顔がこわばっていた。

俺も正直もうだめかと思った。

後藤先生がレンガを思いきり振り下ろした。・・・瞬間リクが放ったボールが後藤先生にヒットした。

後藤先生は一瞬動きを止める。その隙を見計らって剣道部女子の主将、マキが後藤先生に向かって竹刀を振り下ろした。・・・が、その攻撃は後藤先生には当たらなかった。後藤先生は一瞬で10メートル先の場所に移動していた。

それはもはや人間の域を超えていた。細岡先生にしてもそうだ。やはりあの神の力なのであろうか。

後藤先生はすばい動きで生徒を翻弄していた。それと同時に細岡先生が動き出し、どこかに一直線に向かった。それは・・・一人の生徒だった。

「あいつは・・・ダイチ！」

会長には三人の兄弟がいる。いわゆる三つ子だ。会長は長男で三男に科学部のハヤト、そして次男は野球部のダイチだ。顔は似ているがメガネの形がそれぞれ違う。長男は四角、次男は度が入っているサングラス、三男は丸メガネだ。

そして今先生はダイチの頭にレンガをぶつけようとしている。

「来なさい。」

ダイチは会長と同じような不敵な笑みを浮かべた。そしてバットを構えるとあの笑顔を浮かべたまま動かなくなった。まさかあいつ、倒す方法が分かったのか！？

俺はふと思ったが違っていたようだった。恐怖からくる強がりのようだ。

おい、そんなことしていたら！

そしてダイチはあのまま細岡先生の振り下ろしたレンガに頭部を強打されて・・・倒れてそのまま動かなくなった。

「もしかして・・・死んだ・・・？」

ドクン

俺の心臓が跳ねた。

いや・・・もしかしてまだ息はあるかもしれない。

「リク！聞こえるか！？」

「その声は・・・ユウタ？」

俺は通信機を使った。リクは今は球の補給に行っているようだった。このことは知らないらしい。

「そこにダイチが倒れているだろ？そいつのこと調べてくれないか？」

「え？まあいいけど。」

リクは腰を下ろし、ダイチのことを調べているようだった。そして

どんどん表情がこわばっていくのが分かった。そしてリクは大きな声で叫んだ。

「こいつ……息をしていない！頭から血が出ているし……脈もないし……。」

ドクン

心臓が止まる勢いだった。

「そうか……。ありがとう。一人目の犠牲者は……。そいつだ。」
「なっ!？」

「リク、ボーっとするな。そこ、危ないぞ。」

惨劇が起きた場所だ。何が起こるかわからない。

「おい、ユウタ……。」

ブチッ

俺は通信を切った。

どうしよう。会長に一人目の犠牲者が出たことを知らせないと……。でも……。会長の弟だなんて……。

シュッ

通信が入った。相手は会長だ。

「どうだね？大きな動きはあったのかい？」

「……。はい。」

「そうか。なにがあったんだい？」

「……。一人目……。の……。犠牲者が出た。」

「!？そうか……。覚悟はしていたがとうとう出てしまったか……。誰かは分かったのかい？」

「……。はい。」

「誰だい？」

俺は深呼吸をした。こうなったら言うしかないだろう。

でも……。本当にいいのか？会長が壊れたら誰がまとめ役になるんだ……。？

「どうした？ユウタ君。」

「心の準備はいいな？」

「え？ああ、いいとも。」

もう一度深呼吸をした。

「会長、一人目の犠牲者は・・・ダイチだ。」

「・・・。」

何の反応も無かった。

「会長。」

「うそだよね!？」

会長の声からあせりの色が読み取れた。

「本当です。」

「うそだといってくれよ!そんなことありえないよ。だって・・・僕らは・・・。」

「会長。真実だ。俺は・・・本当のことしか言っていない。」

「うわー!」

ブチッ

通信が切れた。

会長・・・俺だって信じたくない。俺の一言で・・・誰かが死んだなんて。

でもそのおかげで野球部の球が先生に当たるようになった。誰かが死んだことで恐怖よりも仕返しという気持ちのほうが大きくなったのだろう。

皮肉なものだ。誰かが死なないと本気を出せないなんて。それともダイチの死は無駄じゃなかったと解釈したほうがいいだろうか。

でも・・・犠牲者が出たことには変わりない。悲しまなければいけないことが起きてしまったことには・・・。

野球部の球が当たるようになり、剣道部にもよりいっそう力が入った。しかし先生はダイチを一人目の犠牲者にするとは誰も襲わず、帰っていいこうとした。

「逃げるだど!そんなことが許されるかよ!」

リクがボールを細岡先生に当てた。細岡先生はリクをにらみつけ、
こういい残した。

「今日の戦いはこれで終わった。また明日ここで会おう。明日はもっと大勢の先生を引き連れてくる。覚悟はいいな？」

「ふざけるな！まだ終わってはいない！」

一人の剣道部の女子が細岡先生に竹刀をぶつける。しかしその竹刀はまたもやすごい音を立てながら折れてしまった。そして細岡先生は左手でその女子生徒を振り払い、帰っていった。

その女子生徒はものすごい勢いで飛んでいき、近くの木にぶつかった。

「アヤ！」

マキがアヤと呼ばれた女子生徒に駆け寄った。

「そんな・・・。」

俺は周りが安全なことを確認し、花壇からアヤのほうへと駆け寄った。

「ユウタ・・・。」

俺は息があるかどうか、脈があるかどうか調べる。

・・・両方とも無かった。

「くそ・・・。二人目の犠牲者か。」

俺がそうつぶやくと周りにいた女子生徒は泣き崩れ始める。

「いやあ！」

一人の生徒が泣きながら学校を出ようとした。

そうか・・・まだ他の生徒には知らせていないんだった。

その女子生徒は門の前で跳ね返された。

「どうして！？どうして出られないのよ！」

彼女はそう叫んだ。俺とリクとヒロは目を背ける。

「どうということ？」

他の生徒たちはざわざわと門に集まり始めた。

「本当だ・・・。出られないぜ・・・。」

「うそ・・・家に帰れないってこと？」

「いやだ・・・そんなのいや！」

男子生徒がフェンスを乗り越えようとした。が、乗り越えようとし

た瞬間また紫色の物体に変わり、出て行くのを拒んだ。

「いやあああ！！」

女子生徒の悲痛な叫びが運動場にこだました。

・・・みんなゴメン。

「ユウタ。そう気落ちするなって。」

リクが俺の背中を叩く。

「そうそう。お前だけのせいじゃないんだし。」

ヒロもそれに続いてくれた。

「・・・そうだな。俺が落ち込んでも何も変わらないからな。俺だけのせいじゃないし。リクのせいでもあるし。」

「何でだよ。」

「お前が俺を促したんだろ？お前があんなこと言わなければこんなことにならずにすんだかもしれないのに。」

「なんだよ。せっかく元気付けてやっているのに。」

「まあまあ。一番悪いのはあの神とか言うやつだろ。それにユウタの意見に反対しなかったすべての生徒が悪いんだ。お前らがけんかしても仕方ないよ。」

ヒロが俺とリクの仲裁に入った。

「お前ばっかいいやつぶるなよ。」

「俺は別にそんなつもりは・・・。」

「いい子はこうしてやる！」

リクはヒロに最大の攻撃を仕掛けた。いわゆるこしよぐり攻撃だ。

「ちよっ・・・やめ・・・あはは！」

お前ら本当に小学生だな・・・。幼稚にもほどがあるだろう。

まあ久しぶりに楽しかったな。・・・おそらくこんなときに楽しんでいちゃいけないんだけど。

そう思い俺はアヤのほうに目を向けた。

名札には一年と書いてあった。そっか、あと二年も楽しいことがあったのにな。

俺は二人に手を合わせた。

「ちょっとあんたたち。楽しんでないでもっとこの現実を見なさいよ。どうなっているか分かっているの！？人が・・・二人も死んでいるのよ・・・」

マキが目には涙を浮かべながら俺たちにきつく言った。二人も我に返ったようにこの現状を見る。

「バカ・・・せっかく忘れるとこだったのに。」

ヒロがぼそっとつぶやいた。それにマキが頬を思い切り叩く。
ビシン

「・・・。」

「忘れちゃいけないの！このことを生かしてもっとがんばっていかないといけないの！あんた部長でしょ。」

「・・・ごめん、マキ。それにアヤも。」

「そうだな・・・でもマキ、男って言うのはどんなときでも明るい雰囲気を作り出さないといけない生き物なんだぜ。」

素晴らしいながらリクは会議室に向かった。

「何よ・・・そんなの屁理屈じゃない・・・。」

「男って言うのは女よりも弱いからな。そうでもしないと本当にだめになってしまう。」

「でも・・・。」

「大丈夫だよ。俺も、二人も内心では落ち込んでいるからな。」

「・・・ユウタもバカだよ。女だって弱いつてば。強くなかなれないよ。あんたも落ち込んでいるなら涙くらい流しなさいよ！」

そういうとマキはその場で泣き崩れた。

「だから、こういうときのために強がっていないといけないんだよ、男って言うのは。」

俺はハンカチを差し出した。

「キザ。」

「たまにはそう言われてみたい時もあるさ！」

「でもありがとう。」

「こちらこそ。」

さてと俺も報告に行かないと……。会長がどうなっているのか心配だし。

そう思って俺は顔を上げた。そこには生徒の視線が一直線に俺たちを見ていた。

「見ていた？」

「ああ。バッチリ。」

一人の男子生徒が笑顔で言う。

俺は赤面するしかなかった。

だって……。たまにはああいふドラマとか、アニメとかあんなかっこいいことしてみたいじゃん。それは男の永遠の夢だろ！

俺は走って戻っていった。

「あっちよと……。俺もいく！」

ヒロが後ろからついてくる。俺はその姿を確認しようと後ろを振り向いた。ヒロはいた。そしてその奥の生徒たちの姿も見えた。

みんな笑っていた。恐怖も悲しみもすべて忘れてしまったかのように。

マキの言うとおりの人の死は絶対に忘れてはいけない。でも……。それでも人は明るく生き続けなければならない。そうでないと人は必ず壊れてしまうから。笑顔のなくした人間はきっと人形のように生きていくんだよな……。

会議室にたどり着いた。

しかし俺はこのドアを開ける勇気が無い。

「どうした？ユウタ。」

「いや……。その……。」

「会長なら大丈夫だって。」

「え？」

「愛の力はすごいんだぜ。お前とモミみたいにな。」

俺はヒロに促されてドアを開けた。

そこにはいつもの堂々とした会長の姿があった。

「やあ二人とも、お帰りなさい。」

「会長……」

「ユウタ君。君には迷惑かけたね。謝罪をするよ。」

「いや……」

「どんなに大切な人の死もすべて受け入れなければならない。それが戦争の掟だったね。そう、命を懸けて戦った勇者に涙を流すとは僕もバカなことをしてしまったようだ。」

そういうと会長は笑っていた。

「ありがとう。ナナエ君。それを君に教えてもらったよ。」

「……いえ……」

なるほど……愛の力はすごいってわけだ。

えっと秘書と会長は両思いつてわけ。まだ告白はしていないようだけど、これは誰が見たって……ねえ？

「ユウタ！」

俺は突然後ろから抱きつかれた。モミだ。

「お、おい……」

「私……すごく心配していたんだよ！ユウタがもしも死んじゃったらって……」

「おい、縁起でも無いこと考えるなよ。俺はこうして生きているんだから。もっと明るいことを考えようぜ。」

「うん。明日からはそうする。」

モミは俺から離れた。モミは笑顔で俺に微笑んでいた。

よかった……。俺にも心配してくれる人がいたんだな……。

「おい、そのバカカップル。こんなところでいちゃついていんじゃないよ。」

俺たちは少し顔を赤らめて会長の方向を見た。

「話はリク君から聞いたよ。明日はさらにたくさん敵を相手にすることになるんだね。」

会長は作戦さんの方向を見た。

「作戦さんと二人で相談したんだけどね……。やっぱり実戦あるのみだと思うんだよ。」

「そこであしたは野球部、サッカー部、テニス部、卓球部、バスケットボール部、ラグビー部、剣道部すべての部活を戦場に送りたいと思います。」

作戦さんが会長に変わって話を進めた。

「なるほど。」

「お互いの状況は通信機で連絡しあってください。ユウタ君は戦いながらも報告を忘れないように。後は皆さん、好きなように戦ってください。」

「敵は強いようだね。生半可な覚悟ではすぐに倒されてしまうよ。そう伝えとくように。」

「はい。」

「そして・・・なるべくの犠牲者は出さないようにしよう。それが約束だ。」

「もちろん。」

アズサが自信満々に言った。

「幸運を祈るよ。解散」

さてと・・・サッカー部にこのことを伝えないと・・・。

俺はサッカー部にこのことを伝えた。みんな顔を見合わせながら意気込んでいた。

さて・・・今日も星が綺麗だ。寝よう・・・。

俺がそう思ったときにはみんな明日に備えて寝ていた。

そのときリクがゴメンとつぶやいたのは俺の空耳だったのだろうか。

第四話 夢の森の住人

4 夢の森の住人

俺が眠りから覚めた理由は通信機から聞こえた声だった。

教室の壁掛け時計の短い針は6をさしている。起きている人は俺を含めてたったの三人。もう少し眠れる時間だった。

そんな時間に通信が入ったのだ。学校の外から鳥のさえずりが聞こえる。何か大きな事件があったわけでもないらしい。

俺は眠い目をこすりながらしぶしぶ通信に出た。

「ユウタ、起きて！」

「・・・なんだよ。」

声の主はアユミだった。あの気が強い科学部部长のアユミだ。朝から何を言われるのかわからない。俺はため息交じりで応答した。

「いい？今すぐ理科室に来て。今すぐよ、十分以内よ。わかった？」

「ああ・・・分かったよ。」

「絶対に来てよ。こなかったら高級イタリアン料理、おごってもらうから。じゃあね。」

何なんだよ。いったい。今、俺は眠いんだよ・・・。はあ・・・。何で行くなんて言っただろう。

重い足を持ち上げて俺は理科室へ向かった。

理科室へ入るとアユミが一冊のノートを持って俺を出迎えた。室内はアユミと俺だけらしい。

「で？十分以内に来たけどなんかあったのか？」

歩いているうちに眠気もなくなっていた。アユミの用事も少し気になっっている。

たいしたこと無かったら許さねえぞ。

「ユウタ。よかった、来てくれて。」

お前が来いって言ったんだろうが。俺は何かご馳走できるほど経済

的余裕は無いって。

俺が他ごとを考えているとアユミがにらみつけてきた。

お前に逆らえるやつは天然のモミしかないって。

「早速だけどこのノートを見てくれる？」

アユミはノートを俺に渡した。表紙には何もかかれていない、一見普通のノートだった。俺は一枚ページをめくってみる。そこには驚くべき言葉が書かれていた。

『人類を滅亡させる毒薬』

俺は息を呑んだ。

俺はペラペラとページをめくっていく。毒薬の作り方が詳しく、丁寧に書いていった。

「最後のページの右の下を見て。上野って書いてあるでしょう。」

「・・・これは上野先生のノートってことか？直筆だからたぶん自分で考え出したことだと思うけど・・・。」

「私・・・上の先生がどうしてこんなノートを作っていたのかわからなくて・・・。」

科学部担当は上野先生だ。科学部は主に花壇の花の入れ替え、池にいるカメや魚の餌付け、星の観察、自然との共存などを行っている。決して薬を使ったことは行っていない。毒薬などもってのほかだった。確かに理科の先生だからひそかに薬の研究を進めていても・・・そこまで疑問には思わないかもしれないが、人類を滅亡させる毒薬となると話が変わってくる。上野先生がそんなことを企てていたら・・・。俺たちだけでは処理できないだろう。

珍しくアユミも震えていた。

上野先生、良い人だからな・・・。

「ユウタ・・・これどうしよう。」

「どうするって・・・。あつ、そうだ。アユミ、確か作戰さんから薬を作れって言われていたよな？」

「うん。ほら、上野先生が残してくれたさまざまな資料で風邪薬とか消毒液とか作ったんだ。今日、作戰さんに提出しようと思ってい

る。・・・まさかユウタ子のノートを見て毒薬を・・・。そんなの無理だからね！私、作戰さんにそこまで言われてないし！」

「でもこの本を利用すれば・・・先生を・・・。」

「ユウタ！？あんた頭おかしくなった？どうして科学部があんな殺人の道具を作らなくちゃいけないの！？ありえない。」

「でも・・・。」

「いやだ！毒薬なんて恐ろしいもの作れるわけ無いでしょ！」

アユミの悲痛な声が理科室に響く。アユミは息を切らしながら最後に俺にこう言った。

「ああ・・・ユウタに相談した私が間違いだったよ！今すぐ出て行って！」

「わかったよ。」

俺は後ろを振り返りながらも部屋を出て行った。

アユミが俺を呼んだのにそっから出て行けなんて・・・。俺は一言も作れなんていっていないだろう。ノートのひとつの使い道として例を挙げただけだ。

「でも・・・それが一番いいと思うんだけどな・・・。」

俺は廊下で一言つぶやいた。

俺はいち早く会議室へ向かうと会長と作戰さんが何かを話し合っているようだった。その内容を秘書がメモしているという状況。俺は三人へと近づき、秘書のメモを後ろから覗き込む。

『食料の問題について。』

学校から支給される食料が開戦二日目にして底をつきそうな状況らしい。早すぎるだろう。

「・・・その男子の証言によると先生も調理場の食料を使っているらしいね。」

「では量を最小限にとどめたにもかかわらずこんなに早く在庫がなくなりそうなのはそのことが理由と見て間違いないわね。」

「でも防ぎようが無いんじゃないの？」

「そうだよ、ユウタ君。そこが問題なのだよ・・・。ん？ユウタ君

かい？君はいつの間に居たのだね？気づかなかったよ。」

会長が俺を見て驚いたようなそぶりを見せた。俺ってそこまで影が薄いのかなぁ・・・。

「ユウタ君。お願いです。このことは他の生徒に知らせないでくださいね。」

秘書が落ち着いた声で言った。

「何だよ。」

「昨日、学校から出られないことが判明し、少し騒ぎが起きたようだね。これ以上みんなを不安にさせるわけにはいかないんだよ。」

「なるほど。」

「さあ、他の人が来たみたいだよ。この話は終わりだ。」

後ろを振り返ると他のみんなが続々と会議室の中へ入ってきていた。その中にはあのアユミも居た。アユミと俺は目が合うとアユミは俺に舌を出して思い切り変顔をしてそっぽを向いた。

幼稚なやつ。

「なーに？ユウタとアユミ、けんかしているの？」

モミが俺の顔をのぞきこむ。

「いや・・・そういうわけでもないんだけど・・・。」

俺はモミと視線をそらしていた。目をあわすと思わず本当のことを話しそうで・・・。いや別にいいんだけどなんとなく・・・。

「？へんなの。」

全員が会議室にそろったらしい。会長が椅子に座りながら俺たちに指揮を取る。

「さてみんな、昨日、とうとう犠牲者が出てしまったね。今日はそんなことが無いように、ベストを尽くしてくれよ。」

「はい！」

「部活を守るために！」

「おー！」

俺たちはいっせいに会議室を飛び出した。

「モミ！」

「ユウタ。どうしたの？」

「今日はモミも戦場に行くからな。・・・怪我するなよ。」

「うん。ユウタもね。」

「ああ。」

モミは俺に笑顔を向けると走っていった。俺は一人、ゆっくりとサッカー部の元へ向かった。

「さあ、今日がお前たちにとっての初戦だ。気を引き締めていけよ。」

「はい！」

「さあ運動場に集合だ。」

俺はサッカー部にそう伝えたと運動場に走っていった。

運動場に集まるのはサッカー部が最後だった。他の部活は空気がピリピリしている。サッカー部も真剣に行かないと。

そう思ったときだった。奥のほうから先生が見えた。ズラリと横一列に並んだ先生の姿が。10人は居るだろうか。その威圧感に少し圧倒された。

「野球部！打て。」

「テニス部も打って！」

「バスケ部の底力を見せてやりな。」

「ラグビー部突撃！」

「剣道部も行け！」

「卓球部も行ってらっしゃい。」

「サッカー部！シュートを決めてやれ！」

「はい！」

それぞれの部活の掛け声が運動場に響いた。それぞれの部活はいっせいに約100メートル先に居る先生を攻撃し始めた。あんなに遠くに居るのだ。簡単に当たるはずがなかった。剣道部とラグビー部は先生に向かって走っていく。そんな中、ひとつのボールが二つの部活を横切る。どうやら野球部がホームラン並みの威力のボールを打ったらしい。そのボールはゆっくりと先生の方へ落ちていき、

先生に当たった。

やった。

俺はそう思ったが昨日の細岡先生の鋼鉄の体を見ると安心してはいられなかった。

そして相手からもうとうとう攻撃が始まった。

相手は黒い鉄球を撃ってきた。そう。撃ったのだ。銃などあるはずもない、出られるはずも無いこの戦争で。どうやって撃ったのかは分からないが確かに銃声は聞こえた。

その黒い鉄球はどんどん俺たちに近づいてきた。前線走る二つの部活も足を止めそうになっていた。だがそれが幸いだった。黒い鉄球は先頭を走る一人の生徒の目の前に落ち、爆発した。つまり前線のチームが足を止めたおかげでその生徒は死なずに済んだのだ。爆発といっても爆風がおこる程度で、被害もその先頭を走っていた生徒が軽症を負う程度だった。しかし爆風がやけに強く、前線チームは俺たちの中距離で戦っている俺たちの部活の近くまで飛ばされた。このことを報告しないと。

俺は通信機に手を掛ける。そのとき、黒い鉄球が俺たちの近くまで飛んできた。

「うわ！」

前線で戦う生徒はもちろん、先生から中距離にいた生徒まで爆風に巻き込まれていた。幸い、俺は飛ばされることは無かったがここまですごい風は吹いてきた。俺はもう一度通信機に手を掛けたが近くに居た一年生の部員が俺の手を止めた。

「先輩！こんなところで立っていたら危ないですよ。あの鉄球がここにまで飛んできたら逃げ遅れますよ！どうやら夢の森には誰もいないようだからそこで連絡を取ってください。」

一年は無邪気な笑顔を浮かべた。

ああ……。こんな顔をするやつを今、俺は戦わせているんだな。そう思うと胸が痛くなった。それに俺は部長だ。部員たちをまとめないと……。

「もしかして先輩……。俺たちのことを心配しています？」

「ああ。」

「俺たちのことは大丈夫ですよ！先輩がいなくなっちゃってやれますよ。だって俺たち、もうすぐ先輩になるんだから。」

「お前……」

「……。そうだな。じゃあ気をつけろよ。」

「いってらっしゃい。」

俺は一年に背中を押され、夢の森へと向かった。

夢の森はいつもどおりの雰囲気だった。ここの一角だけうつそうと植物が生い茂っており、木が何本も立っている。

まあいつもと違うといえば俺しかないことぐらいだ。

よし、さっそく。

「会長、聞こえるか？」

「ユウタ君だね。ああ聞こえるよ。」

「今先生は80メートルくらいまで迫ってきている。まだ顔が分からないから誰とは報告できないが……」

「でも何かあったんだね。」

「ああ。先生はおそらく銃らしきものを所持している。」

「銃かい!？」

「どうやって手に入れたかは知らないけど、危険だってことは確かだと思う。」

「そ、そうか。ありがとう。すぐに作戦さんと今後の作戦を練っていくよ。また何かあったら連絡してくれ。」

「わかった。」

ブチッ

通信が切れた。

さて、俺も戦場に戻らないと。

俺はそう思い、歩き始めた瞬間だった。突然何かの気配を感じた。

俺は特にどんな能力があるというわけではないが明らかに何か俺をじっと見ているようだった。

息が荒い。何か獐猛な動物だろうか。どこにいるんだ？

俺は損場で立ち尽くし、辺りを見回したがどこにも動物の陰は見られなかった。ということは……。

後ろしかない。

俺はさっと後ろを振り向いた。

ガサガサガサ

何かが逃げていったようだった。

「まて！」

俺は思わずそれを追いかけていた。相手はあせっているようで走り方がおかしかった。大きな音を立てながら走っている。そんな相手に俺が負けるはずも無いだろう。そして俺はようやく相手の何かをつかんだ。それを思い切りこちらへ引き寄せる。ようやくその相手の姿があらわになった。

「上野先生!？」

俺は驚きで声がのどに詰まるような感じになっていた。上野先生も恐怖で顔が引きつっていた。俺を直視せず、ただひたすらすみませんとだけ言っていた

「どうして上野先生がここに……？」

上の先生は声の主が俺だとわかると大きく深呼吸をし、冷静に話した。

「なんだ、ユウタか……。驚かせないでくれ。」

こっちだって突然気配がして驚いたって。

「それで、どうしてここに？」

「私だって好きでここににいるわけじゃないよ。ここにすることを余儀なくされたんだよ。誰かさんが戦争を起こしたせいだね。」

「……。」

「あ、いや、君を攻めているわけじゃないよ。」

「……確か先生は全員、神とか言うやつに操られたんじゃない。」

「そうだ。俺たちは確かにその現場を見たのだ。」

「私はたまたま保健室にいてね。・・・いや生徒の乱闘に巻き込まれただけだよ。ほら、あの時ユウタの隣のベッドで寝ていたひと、それが先生だよ。」

私は誰かが殺されたと聞いてもね。・・・そのとき寝ていてね、気づかなかつたんだよ。富田先生も私をおいて出て行ってしまったようだし。」

それで私がすっかり回復して職員室に戻ったときにはあの有様さ。先生方は怖い顔をして戦争なんて言葉をつぶやいているし、ようやく俺が事情を聞き出しても会話には着いていけないし・・・。一番あの雰囲気嫌ね・・・私は職員室を抜け出してここにきたってわけさ。そしてしばらくここで心を落ちつかせて職員室に戻ったときには第二回作戦会議が終わっていて、私はそれに出席できなかったから裏切り者扱いさ・・・。職員室に戻ることも出来ず、君たちに助けを求めても敵としてみなされるから攻撃される。私はここにしか居場所が無かったのさ。

でもそれももう終わりだね。ユウタに姿を見られてしまうとは！こんな話、誰も信じてくれないだろうね。さあどうにでもしてくれ。」

そういうと上野先生は仰向けになり、目をぐっと閉じていた。野生的だな・・・。犬の服従かよ。

「・・・今の聞こえたか？」

「ああ、バッチリね。」

ブチッ

俺は通信を切った。さっき切ったはずだ？上野先生が感情こめて話している間に通信機のスイッチを入れていただけたこと。おかげで説明する手間が省けた。

「・・・会長も信じてくれるってさ。よかったな。」

「え？じゃあ私を信じてくれるんだね！ありがとう、君たちは優しいね。」

「じゃあ、早速校舎に入って会議室に行ってください。」
俺がそういうと上野先生は下を向き、何かを考えていた。

しばらく時間が経過した。俺がもう戦場に戻ろうかと思ったとき、上野先生は突然顔を上げた。そして一言。

「私はここに残る。」

そう言い、にこりと笑った。

「は？何言っているんだよ。こんな所にいたら戦争に被害を受けるかもしれないんだぞ！」

「だから残るんだよ。」

「？」

「私はここに残り、夢の森を守り続ける。」

その顔はとても清々しかった。まるで魔王を倒すと決めた勇者のようだった。しかし簡単に納得するわけにもいかなかった。先生という名の味方がいる。それだけで学校の雰囲気はまとなり、機敏に行動できるだろう。それが生徒のいわゆる反射神経なのだから。

「でも先生、俺たちは中学生でもまだ14年しか生きていないんだ。先生の長年の知恵とかいうやつには叶うはずがない。今の状況もこっちが圧倒的に不利だ。俺たちのほうが人数は多いかもしれないけれど人数じゃどうにもならない問題なんだよ！」

俺はすぐ真剣な顔で話していたらしい。上野先生は少し圧倒されているようだった。しかしすぐに表情を変え、俺の肩に手を置きながら優しくつぶやいた。

「お前たちは犠牲者が出て気持ちが変わったようだな。少しだが団結力が出てきている。みんなを守ろうとする団結力だ。今のお前たちの団結力なら先生に勝てるかもしれない。」

「団結力だけでか？」

「ああ。先生方は今、操られているんだよね？そのせいか、自分のことしか考えてないように思えて仕方ないんだ。まあ、今の大人はみんなそうなのかもしれないが・・・少なくともこの学校の先生方は違ったぞ。お前たちの未来を考え、真剣に取り組む。それは一人の力では出来ないことだ。だが今はそれがまったくないんだ。一人一人が違うことをやっていた。今の先生方には団結力が無い。そこ

を狙うんだ。」

「狙うって・・・どうやって？」

「それはだな・・・。」

「ユウタ！」

上野先生が一番大事なことを言おうと大きく深呼吸した瞬間、俺を呼ぶ声が聞こえた。俺は後ろを振り返る。そこにはアズサがいた。

「一年にここって聞いたんだ。あのね、ユウタ・・・って上野先生！？ちよっ、アンタ離れなさいよ。こんなところで待ち伏せなんて卑怯よ！」

そう言ってアズサはバスケットボールを構えた。

「おい、話を聞くんだ。」

「覚悟！」

上野先生の声はアズサには届かず、アズサはボールをチェストパスの方式で投げた。ボールは俺の顔のぎりぎりをすり抜けていき、上の先生の顔面に直撃した。そしてむなしくも何もなかったようにボールはころろとアズサの元へ転がっていった。

俺は恐る恐る上野先生の顔を見る。予想通りだ。顔面に赤く、バスケットボールの模様が入っていた。

痛そう・・・。

「もういっちょ！」

「アズサ、ストップ！」

俺はアズサにすべてを話した。

「なーんだ。早くそう言ってくればよかったのに。」

お前が話を聞かずにぶっばなしたんだろが。

「・・・えっと、とりあえずごめんなさい。今、手当て係のミキを呼んだから今しばらくお待ちを・・・。」

「いや・・・いいんだよ・・・。元気がいいのは健康だって証拠さあ・・・！」

上野先生は鼻血を出しながら倒れていた。さらに意識が朦朧としているらしい。話し方がまるで酔っ払いだった。しかしそれだけのこ

とだ。乱闘に巻き込まれるし、バスケットボールを打ち込まれるし、見ていてかわいそうになってくる。

上野先生に幸あれ。

だがそんな上野先生にかまっている暇もなく、アズサの話に耳を傾ける。

「そう、ユウタに言いたかったこと！えっと、先生が並んでこっちに向かってきているのが見えたところまではいた？」

「いや、先生が何かを打ち込んでいるところは見た。」

「そう、その爆弾みたいなやつに前線は苦しんでいたみたいだけど、カズヤが爆風をよけながら先生の尾ころまでたどり着いたのよ。・・あいつ足だけは速いからね。でもカズヤはね、何もせずに戻ってきたの。」

「どうして？」

「先生が・・すべて紙で出来ていたのよ。」

「紙!？」

俺は思わず大声を出した。

「そう。どうやらあの爆弾みたいなやつはボールが当たるとその強さと距離を計算して爆弾を落とす機会だったらしいわ。」

「へえ・・・。」

俺はまるでドラマを見ている気分だった。

「でもそんなこと誰が？」

「作戦さんよ! あんたの様子を確認するために運動場まで来たらしいけど。」

作戦さんが・・・。

「ア、アズサさん!」

「ミキ、こっちよ。」

ミキと数人の合唱部が救急箱を持ってやってきた。彼女たちは早速手当てを始める。

「えっと、鼻血を出していますね。とりあえず座って下を向きましょう。ティッシュです。これで鼻を押さえていてください。じきに

とまると思います。えっと次・・・消毒・・・」

さすが女子だな。慣れた手つきだ。

「何見とれているのよ！」

アズサがこつちをにらみつけて浮気？とかつぶやいていた。はん、そんな分けないだろ。

「えっと、上野先生、保健室で休んだほうが良いですよ。さあ、早く。」

「いや・・・私はここに残るよ。この夢の森を守りたいからね。」

「上野先生・・・。」

「夢の森は私が10年間かけて育ててきた大切な木々たちだ。いわば子供みたいなものだよ。この森が死ぬときは・・・私も一緒に死ぬときだ。」

俺たちは思わずしんみりした。上野先生があわててもっと楽しく！と盛り上げたてる。

自分でこんな空気にして・・・バカじゃないの？

「・・・わかったよ。上野先生はここにいいよ。」

「ええ！？いいの？」

アズサが驚いていた。

「だって・・・ここまで言われると反論のしようがないだろう。」

「まあね・・・。」

アズサは少しあきれたように言った。まあ、森のためにここまで命を懸ける人も珍しいよな。

「さてアズサさん、ユウタ君、そろそろ運動場に戻りましょう。」

「いや、俺は少しだけ残るよ。」

「ふーん。でもあんたも様子を確認しに運動場に来なさいよ。」

そう言ってアズサとミキたちは運動場へ帰っていった。さて、俺は上の先生に確認したいことがあるんだ。

「戻らなくて良かったのか？」

「まあいけなかったんだろうけど、ひとつ・・・確認したいことがあるんだ。」

「なんだ？」

「人類を滅亡させる毒薬・・・俺とアユミが見たんだけど、あのノートはいつたい・・・。」

「！？そうか・・・見てしまったか・・・。あれは私が大学生のころにすべてがいやになって考え出したものだ。実際には科学的根拠は無いが・・・理屈は合っているらしい。そういつてくれたな。」

「誰が？」

「このノートを見て私に理科の先生になることを進めてくれた人だよ。・・・今の校長先生だ。あの人のおかげで私はここにいます。」

「へー・・・。校長先生ってなんかカッコいいかも。・・・これでバカンスに行っていないければ・・・。」

「しかしあのノートを見つけたとは・・・。どうだい？二冊にわたり書き綴った私の最高傑作は。」

「二冊？俺たちは一冊しかみてないぞ。」

「え？そんなはずは・・・。ああそうだ！もう一冊は職員室においてあったな。いろいろな薬乗研究の資料と一緒に。」

「職員室？・・・いろいろな薬の資料・・・。もしかしてその中に爆風だけが強くなる爆弾とか・・・。」

「ああ、あったあった。」

間違いない。あの先生の中にそんな危険なことを考えるのは昔荒れていたという上野先生しかいないだろう。その資料を見てあの爆弾は作ったんだ。だったらもしかして・・・。

「もしかして毒薬のノートも使われて・・・。」

「なに！？あのノートには毒性が強くて人を大量虐殺することが出来るものしか書いてないぞ！」

「先生はあの資料が本当のことが書いてあるかどうか調べるために今日のことを・・・。」

「そしていつか大量虐殺する日を狙っている・・・。」

俺は突然足の力が抜けた。さすがに俺も怖くなった。そんなこと・・・

・あつてはいけないのに。
シュッ

通信機からだ。

「ユウタ！」

相手はモミだった。

「モミ！」

「よかった。なかなか帰ってこないから心配したんだよ。もしかしたら・・・って。」

「だから、それは考えるなっっていったら。」

「・・・だって・・・。とにかく、みんな待っているよ。早く帰ってきて。」

「ああわかった。」

ブチッ

通信が切れた。

「だめだぞ。彼女に心配かけちゃ。」

「・・・うるさいな。まあ、そういうことだから。」

俺はそう言って会議室まで戻った。

「ユウタ君、よく戻ってきたね。」

会議室の中は安心していている人や怒っている人が入り混じり変な空気になっていた。

「会長、重大な報告がある。」

俺は今日のことを報告した。すべてではない。あのノートのこと意外は。

「そうか、ありがとう。こっちも報告だよ。これをみたまえ。」

会長が取り出したのは先生の写真がプリントされている紙だった。

それか、アズサが言っていたのは。下には車のラジコンがついていた。なるほど。これで先生を動かしていたのか。

「一枚の紙かと思ったかい？ 実は中には衝撃を感知する機械が入っているんだよ。そして振動が起ると、車についているこの大砲みたいなのやつで攻撃をしていたというわけだろう。どうやら重量の関

係で一台一発のようだがごらんのとおり、十二台もある。それが今回の件のからくりさ。」

なるほどね……。

「でもこんなのが職員室にあるのか？」

「そう、そこが問題なんだよ。職員室だけでここまでのものを用意することは不可能だ……。」

そう会長が言うと、会議室は静まり返った。しかしいくら考えてもわけが分からない。そんなときに一言、作戦さんが言い放った。

「この中に裏切り者がいるんじゃないの？」

「!？」

また会議室は静まり返った。今度は何か緊迫感まで交じっている。

「裏切り者……？この中に？」

サキが不安そうに声を上げた。

「このなか……。」

「だってそうでしょう？他の生徒たちは、普段は教室で待機、トイレも長ければすぐばれる。戦場にいるときは一人で行動することはまず考えられないでしょう。行動しようとしてもそんなの目立ちすぎているわ。」

「一人じゃないかも……。」

「数人ならなおさら目立つでしょう。それに職員室に向かうときは保健室の近くを通らなければならぬ。その場合、合唱部の誰かが気づくでしょう。いつも保健室で待機なんですから。」

「私が知るところではそんな足音がすることは無いと思われます。」
ミキが行った。

「つまり、この中でしかありえない……。」
バンッ

モミが思い切り机を叩いた。

「この中に裏切り者がいる？そんなことありません。」
そしてきっぱりとそういいきった。

……あんな起こった表情のモミ、初めてだ。

「あら？そんなこといいきれなの？」

「だって、生徒が死んだのですよ！どうして生徒が死んだというのに先生に協力する必要があるのですか！？」

「フフフ・・・人間を信じているのね。」

俺はなぜか寒気がした。

「私も、信じられていると思いますから。」

「すごい自信ね。でも・・・そんな偽り、すぐに破られるわ。」

「そんなこと・・・。」

パン

会長が手を叩く。その瞬間モミの言葉がとまった。

「二人とも、今は仲間割れをしているときでもないよ。裏切り者の存在はきわめて不確かなことだ。でも・・・信じたくは無いけどね、可能性が無いわけでもないんだ。結果、こんなところで言い合っているもどうにもならないんだよ。」

会長が二人を言葉でなだめた。

・・・裏切り者か・・・。

決して信じたくはない。が、ありえないとはっきり言うことができない自分が嫌だ。

それに比べてモミは・・・すごいよな。はつきり言うことができるんだから。

その後の会長の明日の指示はまったく頭に入らなかった。どうやらサッカー部は出動しないらしい。それだけだった。

・・・今日の夜は眠れないだろうな・・・。

そう考えながら一日が過ぎていった。

次の日だ。

予想通り眠れなかった。まだ裏切り者という文字が頭の中に浮かんでいるが俺にはやることがある。

俺はアユミを通信機で理科室に呼んだ。アユミは少し嫌そうだったがしぶしぶ来てくれた。

そこで俺は・・・アユミだけに昨日の先生と話したノートのことを

伝える。

「そう……。私今日、上野先生と話してくる。」

「そっか。」

「ユウタ、ありがとう。」

「……。いや、別にいいけど……。どうして俺なんだ？」

「え？」

「いや、相談相手がどうして信頼している女子でもなく男子の俺なんだろう……。って。」

俺は少しだけ気にしていた。相談役としてはうれしいけど疑問も残る。

「……。いや……。女子は正直言ってこんなこと相談するとおびえちゃうと思うから。戦争中はそんな気持ち持ちっちゃダメでしょ。男子の中でユウタを選んだのは……。男友達としては一番信頼しているからよ。」

「それはお前の好きな人じゃないのかよ？」

そう、アユミには俺ではないほかに好きな人がいる。まあ、今はあえて言わないでおこう。話すのはエピソードつきで……。

「!!ば、ばか。好きな人はそういうのじゃなくて……。その……。二人きりになるのが怖かったのよ……。」

強気なやつが何いつているんだか……。そういうものなのかな？女子って言うのは。

「それに友達として信頼しているのは本当。好きな人は……。友達以上だから。」

アユミの顔が真っ赤になった。たまーにかわいいところあるんだよね、こいつ。

「じゃあね。私も忙しいから！」

そういうとアユミはノートを持って走っていった。

……。さて、俺も行くか。

会議室で説明を聞いた後、俺は運動場へ向かった。ちなみに今日出勤するのはテニス部とラグビー部だ。

俺はまた花壇に隠れて観察していた。しばらくすると職員室から変なロボットがモミたちに近づいていく。俺はいったい何をするのかと緊張していたが、そのロボットは一枚紙を置くと、すぐすごと帰っていった。

「ユウタ！これ見て。」

モミが見せてくれたロボットの置き手紙には『今日はこれで終わりで。』と書いてあった。

「ユウタこれ、どういう意味かな？」

「・・・俺たちは完全になめられているな。」

「そう、このこと会長さんに報告したほうがいいよね？え？いいや、私がしておくよ。ユウタはゆっくり帰ってきて。後ろで待っている人がいるみたいだから。」

そういうとモミは走って帰ってしまった。

その姿を見た後、視線を置くに向ける。そこにはアユミがいた。

「モミに悪いことしちゃったね。」

そういいながらアユミは夢の森から帰ってきた。俺はアユミとゆっくり帰ることになった。

「上野先生なんだって？」

「毒薬、作るかどうか相談した。今、作りたくないなら作らなくていいって。もし作る必要があると思ったとき作ればいいって。」

「そうか。」

「でも・・・やっぱり上野先生が書いたことは信じられないな。」

俺はアユミに歩幅を合わせてゆっくりと歩いた。しばらく無言で歩いていると、いつのまにか会議室までついていた。

俺は会議室の扉を開けた。

「・・・わかった。しかたないな・・・。」

そこには苦笑いの会長の姿があった。その前には激怒しているリク・・・。

「にやあ。」

そしてシュガーが鳴いていた。

俺にはなぜかその光景が嫌な予感がしてならなかった。

第五話嫌な予感

5、嫌な予感

次の日だ。

その日だされた朝食はいつもより明らかに少ない。

・・・一昨日はなしていたことか・・・。

俺は食料問題について思い出す。周りの生徒は不満を漏らしていたがそんなこと言っていられる状況ではないことを俺にはわかる。食料のことも、この戦争のことも。

・・・昨日からのこの嫌な感じを取り除かないと。

そう、昨日の会議室へ入った瞬間感じた嫌な予感・・・。俺は別に予感を信じるわけでもないが今感じているのはいつもとは何か違う。まるで本当に嫌なことが起きてしまうような・・・。おかげでまた会長からの指示を聞き逃した。カズヤに聞いたらサッカー部はあるって言っていたけれど・・・。

どうしても今日は行きたくないのだ。

まあそんなわがままも聞いてくれる人はいないことは分かっているけど。

「・・・会議室・・・行くか。」

俺は会議室へ向かう。いつもどおり俺が最後だった。

「さて、今日もがんばるように。・・・ユウタ君、あまりに遅いから話を終えてしまったよ。」

「大丈夫だ。サッカー部は運動場に出ればいいんだろ？」

「そのとおりだ。さあみんな、死なないでくれよ。」

死なないでくれ・・・か。俺も今はそう強く願っている。戦争に犠牲はつきものって誰かが言っていたけれどそんなこと間違っている。今日はとくにそう感じる。

「勝利の花を咲かせよう！」

「おー！」

今日も会長のまとめの言葉がかかった。

・・・でも今のはダサくないか？

まあそんなことも考えながら俺たちは運動場に向かった。それぞれ部員を引き連れて。

俺たちサッカー部は珍しく全部活の中では最後にならなかったようだ。・・・人がどんどん集まってくる。運動部は全員集まることになったのだろうか。それでもまだ人が集まってくる。

・・・あれ、さすがにおかしくないか？

俺は近くにいたモミに事情を確かめる。

「運動部全員にしてもやけに人が多すぎないか？」

「え？なにいつているの？今日は全校生徒が戦場に集まるんだよ。」

「文化部も？」

「うん。」

そうだったんだ・・・。ぜんぜん聞いていなかった。

「昨日のことで完全になめられていることを報告したらリクが怒っちゃって・・・たとえ猫一匹だろうがなんだろうが全校生徒総出で戦いましょうと。会長さんもさすがに反対していたみたいだけどリクに圧倒されちゃったみたいで要求を呑んだみたい。」

昨日はそういうことだったのか。

シュッ

突然通信機から連絡が入った。相手は秘書と会長だった。

「ユウタ君、あなたは報告のために戦場からはなれて別行動をしてくれませんか？」

「秘書か。でも俺、一応部長だけど。」

「それに関してはどうにでもなるでしょう。」

いやそんなこともないけど・・・。

「とにかく君には別行動をしてもらうよ。わかったね？」

「・・・わかったよ。」

ブチッ

しょうがない。別の二年生に頼むか。

俺は副部長に部員の指示を頼み、別行動をした。といってもいつもの花壇に身を潜めるだけ。花壇の近くには職員室がある。だから敵が来たことをいちはやくモミたちに知らせれば俺に役目ができるかな。

そう思っていたとき、先生が職員室から出てきた。

えっと、誰かな・・・。

俺は顔を確認しようとする。しかし顔が確認できなかった。

先生は全身白い服に、白いヘルメット。ヘルメットの除き口は黒くコーティングされており、顔が確認できない。まるで宇宙服だ。いわゆる完全防備といったところだろう。

えっと人数は・・・五人。でも一人一台ずつ持っているあれは何なんだ？

先生は掃除機みたいなものを持っていた。しかし掃除機にしては全体に大きすぎる。第一に戦争に持つてくるはずが無いだろう。

あの完全防備みたいな格好にあの不思議な機械。それに今までのこと・・・。なにかがつながる気がする・・・。

『そしていつか大量虐殺する日を狙っている。』

この言葉が突然浮かんだ。

大量虐殺が出来る日・・・。あの運動部が全員集まった日でも出来たはずだ。しかし先生はそれを行わなかった。・・・ということはもっとたくさん生徒を効果的に・・・。

今日しかなかった。

ということはあの掃除機みたいな機械には毒薬が・・・！？あの服装は自分たちが毒薬を吸わないために・・・！！なるほど、どこかの男子が挑発に乗ることを想定してわざと戦おうとしなかったのか。やばい。みんなの近くであんなやつばら撒かれたら俺たち全滅だ。俺は通信機に手をかけた。そしてモミにこのことを知らせようとする。

「モミ！聞こえるか！？」

「・・・ユウタ？」

「モミ、みんなを連れて早く運動場から離れろ！」

「え？どうして？説明してくれないと分からないよ。」

「そんな暇は無いんだよ！俺も今からそっちに行くから。」

ブチッ

俺は通信を切った。

そして全力でみんなのもとへ走り出した。・・・しかしこのことが命取りだった。俺の姿に気づいた先生は今までゆっくり歩いていたペースを速めた。

作戦に気づかれたことに相手も気づいたのだろう。

やばい、このままだと・・・。

俺は生徒たちの姿が見えると大声で叫んだ。

「みんな！逃げろ！相手は毒をばら撒こうとしている！」

どうやらモミが先にみんなを誘導してくれたらしい。俺の声でさらに緊張感が高まり、本気で逃げる生徒が多くなった。

俺は足が俺よりも遅い生徒をすり抜けて運動場を通り過ぎた。そこには部長たちが待っていた。

「おい、どういうことだよ。」

「上野先生が毒薬の研究をしていてその本が先生に手に渡ったんだよ。」

「なるほど・・・。それでこの全校生徒が集まった今日、ばら撒こうとしているわけね・・・。」

「感心している場合じゃないっつーの。」

俺はみんなを会議室へ向かわせようとした。

「あ・・・。」

そのとき、ケンがおびえた表情で一言そう漏らした。

その声に合わせて俺たちは後ろを振り返る。

そこには、運動場に残っているたくさん生徒たちに先生たちが・・・毒ガスを噴射している姿があった。

無残にも俺の嫌な予感は的中してしまったのだ。

紫色の気体に包まれていく生徒たち。すると苦しそうにばたりと倒れていく。涙を流して倒れていく生徒、憎しみの目で先生をにらみつけながら倒れていく生徒、死にたくないと呼びながら倒れていく生徒……。その姿はどれもがき苦しんでいて、見るに耐えられなかった。

「……そんな……。」

女子たちは手で口を押さえ、声を殺しながら涙を流していた。マナミにいたっては座り込むほどだった。男子たちも恐怖の表情で満ち溢れ、ただ何も語らず呆然と立ちすくんでいた。また、俺もそうなっていたのだろう。きっと生気を無くしていたと思う。

こんなに大勢の死を目の当たりにするのは誰もが初めてだ。そして誰もがこの真実を受け入れられなかっただろう。

だって……。俺たちはこの光景を目にしながら生き延びてしまったのだから。

俺たちはこのことに関しては何も悪くないだろう。それでもこの俺たちにのしかかってくる罪悪感は何なのだろうか。決して拭い去ることの出来ない、この罪悪感は……。

俺はゆっくりと手を合わせて目を閉じた。

みんな、いままで本当にありがとう。そしてどうかこのことが嘘であってください。

そんなありえない願いを抱きながら俺はただそうするしか出来なかった。

「……いかないと……。」

アユミが運動場へ駆け寄った。紫色の毒ガスはだいぶ薄くなってきたいて、先生たちはもうとくにいなくなっている。するとアユミはどこからともなく試験管を取り出して周りに残っていた紫色の気体を入れてふたをした。そして俺のほうへ駆け寄ってくる。

「……ユウタ。私作るよ、毒薬。先生を倒すためじゃないよ。みんなに敵を討ちたいだけだから……。」

そういうとアユミは理科室へ走っていった。

・・・そうだ。アユミも自分のできることをやっている。俺も何かをやらないと・・・。

そう思い、俺は運動場へと視線を合わせた。すごい死体の数と驚くほどの静けさにしばし現実を忘れた。しかしもう一度運動場に目を凝らすと一枚の紙が落ちていることに気がついた。俺はその紙の内容を読み上げた。

『明日は休戦とする。またあさって会おう。』

紙にはそう書いてあった。

「・・・よかった。これで落ち着けるかな・・・。」

後ろからモミが紙を覗き込んでいた。

「・・・モミ、みんな・・・ごめん。俺・・・情報が遅すぎたみたいだ。そのせいでたくさんの命が失われた。本当に・・・ごめん。」俺は視線を下に向ける。すると、ふとあの無邪気な笑顔を見せた一年の姿が目に入った。哀れ、死体と成り果てて。俺はさらに罪悪感に押しつぶされそうになった。

しかしそんな俺を見てモミが一言、俺に笑顔を向けて言った。

「でもこれだけの人数が生き残れたのはユウタのおかげだよ。ありがとう、ユウタ。」

俺は目を丸くした。

ありがとうだなんて予想外だった。俺にこんな言葉があってはいけないと思った。

だって・・・だって俺は・・・。

「ユウタ、自分を責めても何も起らないよ。元氣だそう！」

もう一度モミが俺に笑顔を向けた。しかし目には涙が光っていた。

・・・モミだって辛いはずなのに・・・俺がモミに励まされるなんて・・・。

「俺、情けないな。モミ、ありがと・・・。」

俺の言葉を遮って、モミが俺に抱きついた。俺はしばらく黙って、そのままにいることしか出来なかった。

しばらくたったであろう。俺たちはやることを終え、会議室に戻る

ことにした。その間にみんなにも笑顔が見え始めているようだった。最後に俺は後ろを振り返った。

そこには変わることなく、倒れている生徒たちの姿がある。

勇ましく戦った勇者たちは悲しくも無残に、そしてあまりにも儚く散っていったのだ。

俺たちが会議室に戻ると、会長たちは笑顔で俺たちを出迎えてくれた。

「みんな、あの惨劇の中よく生き残ってくれたね。今日のことはとても残念だった。どうやら多くの死者を出してしまったようだからね。勇敢に戦ってくれた仲間たち・・・ご冥福を祈るよ。」

俺たちは運動場に向かって手を合わせた。

「でもこれだけの人数が生きているんだ。僕はこのことを喜ばなければいけないと思う。」

「ええ、幸い全滅した部活は無いようですし・・・今の皆様にはつらいと思いますが引き続き明後日には戦ってもらいます。しかし・・・明日は療養のため、作戦のことを忘れて自由に過ごしてください。

このような言い方はどうかと思われるかもしれませんが、恐怖に憋えていては先生を倒すことは出来ないのです。そのような生徒はこの戦場には必要ない・・・明後日になっても怖いという気持ちがある生徒は無理やり参加させないでください。それが相手のためにもなると思いますので。」

冷静な作戦さんが珍しく熱く語っている。

一通り話が終わると、作戦さんはふらふらと椅子に座り込んでしまった。疲れきっているようだ。その額からは汗がにじんでいた。その様子からも戦争によって追い込まれていることが分るだろう。作戦さんはしばらく何か考えている様子だった。

「さっき作戦さんが行ったとおり、明日は作戦のことをすべて忘れて自由に過ごしてくれたまえ。さて、今日のことを胸に明後日はがんばるように。解散！」

みんながいっせいに会議室から出て行った。俺は報告がまだだった

ため会議室に残っているのだが、会長たちの様子があきらかにかおかしい。まあそんなことはさておき、報告をしないとな。

「えっと会長、報告をする。今までの死者は生徒532名のうち138名。前回で二人の犠牲者が出たから、今回の死者は236名だ。」

「そうか、約三分の一の生徒が犠牲者になってしまったんだね・・・。無念だよ。」

「先生が使った毒ガスは今、科学部が調べている模様だ。」

「科学部・・・そういえばアユミ君がいなかったね。すこしショックが大きすぎたかな。顧問の上野先生が作った本を利用されてしまったのだろうか？」

「ああ。でも・・・あいつなら大丈夫だと思います。」

「どうしてだい？」

「いや・・・なんとなく。だって、俺の幼馴染だからな。」

俺とリクとカズヤとアユミとモミは幼稚園時代からの幼馴染だ。

「そうだね、アユミ君は強い人だからね。」

「ああ。じゃあ俺もそろそろ・・・。」

「ちよつとまった。」

突然会長が俺を引きとめた。

・・・少し転びそうになったじゃないか。

「君に明日、してもらいたいことがあるんだ。」

「なんだよ。」

「明日、部活13種類をすべて周ってその様子を僕に報告してほしいんだ。」

「・・・自由っていったのに部室に誰かいるかな。」

「いなくても良いんだよ。ただ・・・一人でおびえている人がいたらかわいいそうだと思うってね。」

「なるほど。わかった。報告するよ。」

俺は会議室を出ようとした。

「ユウタ君。」

作戦さんだった。

「ごめんなさい。あなたには自由時間を与えられなくて……。」
「別にいいんだよ。」

戦争を起こした罰だと思えば……。

俺は会議室を出た。俺はすぐに部室に行こうと思い、足早に歩き出した瞬間、会議室から声が聞こえてきた。

「ユウタ君に説明してもらったものでは少し辻褃が会いませんね。」

「ああそうだね、ナナエ君。」

「どうして先生方に……私たちが全校生徒を戦場に送り出すのが分かったのか、ですね。」

作戦さんが静かに言った。

「……こうなってくると……裏切り者の存在を考えざる終えなくなってくるね。」

「信じたくはありませんが。」

俺は静かにここを離れた。これ以上聞くのがつらくなったのだ。

嫌な予感も的中して、裏切り者の存在も再確認されて……。今日は散々な日だ。

俺は肩を落として歩く。

そんな俺を星と月だけが明るく照らしていた。

第六話 怯えるもの

6 怯えるもの

次の日だ。

ああ、昨日ほど眠れなかった日は無かっただろう。

夜中中ずっと聞こえるすすり泣きの声と、泣きながら話す声。

とうとうこの202からも犠牲者が12人出た。ちなみに1クラス40人である。そのせいで女子たちが一晩中泣き明かしていたのだ。しかし今では昨日のことがうそのように笑顔で隣の女子同士で話している。

・・・わからねーなあ・・・。

女子というのは泣き虫なくせに立ち直りが早いし普段は虫一匹で大騒ぎするくせにいざとなったら男子より度胸があるというか・・・。男は度胸、女は愛嬌。・・・そんなムリだと分かっている言葉はいったいどこの誰が作ったのやら。

まあ、モミは愛嬌があるから良いけど。

さて、さっさとこの少ない朝食をとって部活を周ってこないと。

・・・久しぶりに戦いが無い平和な日が来たのか。

平和か・・・こんなにも大切なものだったなんて・・・。

俺はそんなことを考えながら朝食も済ませ、早速部室を回ることにした。

えっと、まずは運動部を周っていかうか。最初は剣道部だ。

まあ部室といっても第二体育館なのだが。

「面！」

「胴！」

外からはそんな声が聞こえてきた。

自由だって言うのに本当にいるんだな、練習している人が。

集中しているようだから俺が入ってきたこと気づかなかったりして。

よし、そのときは驚かしてやろう。

俺はそんな期待も膨らませていたが第二体育館の扉を開けると今までの声はなくなり、あたりに静けさが走った。そしていっせいに剣道部がこちらを向く。全員が面をかぶっていて顔は見えない状態だった。

ああ、正直一瞬だけ怖かったよ。なんかわけのわからない縦と横の線がいっせいに俺の顔を見つめてきたんだから。

そんなおびえた表情の俺に部長、ヒロが気づいたようだった。ヒロは手馴れた手つきで面を取り、俺に白い歯を向ける。額には汗、しかしそれをもかっこよく見せてしまうヒロのルックス。それであつてあの笑顔は女子は悩殺であろう。実際、同じく面をはずしていたマキが頬を高潮させているところが見えた。まあこの剣道部にはヒロ目当てで入部するようなバカな女子はいないようだったが、剣道部の中にヒロのことが好きな女子も多いらしい。

・・・それなのにな・・・。

覚えているだろうか。ヒロは女心が分らず振られた経験が4回も・・・。

恋して恋されそして振られる……。さてヒロに春は来るだろうか！
・・・なんて、話を戻すか。まずこの戦争を終わらせないと春は来ないようだし。

「自由だというのに・・・練習熱心だな。」

「ああそうだろう。剣道部は全員出席しているんだぜ。」

「吹奏楽部もです。」

サキが面を取りながら言った。

そうか、吹奏楽部も前線で戦うんだったな。

「みんな素人だけど頑張っているよ。」

「へー。じゃあ昨日のことでおびえている生徒はいないようだな。」

「バーカ。」

ヒロと話しているとマキが横槍を入れてきた。

「おびえていない生徒はいないと思うよ。ただみんな、落ち込むん

じゃなくてがんばろうとしているだけ。」

「そうだな。剣道は忍耐が必要だからな。」

「吹奏楽部も頑張りますよ！吹奏楽はチームワークが命ですから！
ねっ！」

「オー！」

吹奏楽部であろう人たちが叫んだ。

「なるほど。じゃあ、ここは大丈夫みたいだな。」

「ああ。」

最後にじゃあなと声をかけるとヒロは優しく微笑んでいた。あんなときでも笑えるんだな。つよいな・・・。

俺はヒロに別れを告げたあと、第一体育館に向かった。えっと確かバスケットボール部と卓球部だっけ。

俺は第一体育館の扉を開けた。

まずは卓球部から。

「あ、ユウタだ。」

「そうだよ、ユウタだよ。」

俺はケンに話しかける。ケンは背も低いし少し子供っぽいからな・・・何されるか分からない。まあ俺たちも子供だけど。

「僕に何か？」

「いや、卓球部は休んでいるやつとかいるか？」

「・・・三人だけ休んでる。自由だから普通だよな・・・卓球部は被害者が一番多かったからね、みんな頑張らないと、って思っているんだと思うよ。」

なるほどね・・・。だからこんなに人数が少ないのか。

「おびえていそうな人は？」

「うーん・・・。今のところは極度におびえている人はいないけど、友達とかいなくなっちゃって悲しんでいる人はたくさんいるよ。当たり前だよな？」

「そいつは大丈夫なのか？」

「えー・・・？わっかんない！」

それでいいのか・・・。

「でも、いざとなったら僕がどうにかする。部長として、責任を負う。」

ケンの顔が真剣だった。ケンのあんな顔は初めてみた。

「三人の部員はどうしてるか分かるか？」

「・・・ごめん。わかんない。あとで探しにいくよ。」

「ありがとう。それだけだから。」

俺はアズサのところへ向かおうとしたそのとき俺の肩に衝撃が走った。

「いってえ〜！」

後ろを振り返るとケンが笑顔でこっちを見ってくる。

「どう？結構痛かったでしょ。これなら先生ひるますことぐらいできるよね！」

ケン・・・おまえ・・・それは先生にやれよ。

「じゃあ、ごめんね！」

ケンはまた練習に戻っていった。ふざけるのもたいがいにしるよな・・・。

気を取り直して次はバスケ部・・・。

「アターック!!!」

「のわっ！」

また俺の体に衝撃が走った。次はさっきよりもっと痛い。当たり前だ。バスケットボールは硬いんだから。

そう、マキがふざけてバスケットボールを俺の体に打ち込んだのだ。

「痛い・・・。」

「あははは！そんなんじゃないこれからやっていけないわよ！」

笑っている場合じゃないって。骨折れたよ絶対。だって痛いもん。すごい痛いもん。

「・・・何にらみつけてるのよ！文句ある!？」

あるよ。普通にあるよ。

「お前、バスケットボールが体に当たったことないのかよ！あるよ

な！痛かっただろ、すごく。」

「うん。」

うんって・・・。

「頼むから味方同士、怪我はさせないでほしい。」

「わかったわよ。」

分かれればよろしい。まあ幸い骨は折れていないみたいだし。

「えっと、全員集合しているか？」

「してるけど？」

「おびえてる人とかはいる？」

「うちらは全員フレンドリーだからね！そんな人がいたら部員総出で励ましに行くわよ！」

大丈夫そうだな。

「・・・それだけだから。」

「それだけ？」

「ああ。」

俺は早く体育館から出たかった。あの二人、とにかく怖かった。

「ちょっと待ちなさい！」

しかしアズサに呼び止められる。なんだよ。

そう思いながら俺は振り返った。

「・・・ユウタ・・・。」

そこには泣いているアズサの姿があった。

「親友・・・無くしちゃったの・・・別になんでもないんだけど・・・嫌いにならないで・・・ごめん。」

無理やり笑顔を作るアズサに俺は何も言うことが出来なかった。

ただうなずき、その場を立ち去った。

女性の涙はどうすることも出来ない。どうすればいいか分からないから。

まさかアズサの涙を見ることになるなんて・・・。気の強いやつだったから少し動揺する。

やっぱこんなことして喜ぶやつはいないよな。

次はテニスコートだ。どうやらテニス部も同じく練習しているらしい。もちろんながらモミもだった。

「ユウタ!!」

モミは俺を見つけると一目散に走ってきた。

「落ち込んでない？」

「大丈夫だ。モミは？」

「うん、大丈夫。」

そういうと笑って見せた。俺にはわかった。これは作り笑いだっ
ことが。モミも・・・アズサみたいに無理しているんだろうな。

「部活のほうは？」

「二人居ないけど部活は強制されているわけじゃないからね。参加
しているみんなは元気だよ」

「じゃあ大丈夫みたいだな。」

二人か・・・彼女たちもあとで探してみよう。

一生懸命練習に禿でいる生徒たち・・・少し胸が苦しくなる。

「サッカー部も練習頑張ってるみたいだね！」

「え？」

「部長もたまには参加してあげてね。」

モミはそういうと飛んできたボールをキャッチし、後輩に渡しに行
った。手を振っていることがわかったから、俺はそのぼを立ち去っ
た。

そうか・・・練習なんてめんどくさいのかと思っていたけどあいつ
らも頑張っているんだ。

遠くではサッカーのボールが高く打ち上げられていた。

「つま先で蹴るからそうなるんだよ・・・。」

すぐにでもサッカーボールを蹴りたかったが、まずは会長の命令が
先だ。

次は野球部か・・・。

「リク！」

俺はリクを呼んだ。さすが野球部だ。野球帽がさまになっている。

「おう、ユウタ。どうした？」

「ここも部員集まってるんだな。」

「ああ。暇でしようがないってよ。」

「おびえていたりする人は？」

みたところいなさそうだけど・・・。

「ああ、いないぜ。」

やっぱり・・・野球部っていろんな意味でバカって言うか・・・。

「ありがと、それだけだから。」

俺は立ち去ろうとする。

「ああ、そうだユウタ。アユミの様子・・・どうだ？」

「え？」

「いや、知らないんじゃないんだ。」

リクがごまかしたり嘘をついたりするときは笑顔で足をとんとんと軽く地面に打ちつける。今回もそうだった。アユミのこと心配なんだな。幼馴染として。そして・・・。

「じゃあ、行くよ。」

俺はサッカー部へと向かった。リクの寂しげな表情は初めてじゃない。

「お前たち、やってるか？」

「部長！」

後輩や同級生が俺をじつと見てくる。ああ・・・いやだ。どうせなら女子がいい。

「どうだ？アキラ。全員出席してるか？」

アキラはサッカー部の副部長だ。そして俺の苦手なやつ。

頭脳明晰、運動神経抜群でしっかり者でクール、そしてイケメン。後輩と女子から絶大な人気を得ている。いわばこの学校の憧れの的である。

でも俺は正直こいつは信用していない。やきもちではない。ただの敗北感である。

この部長という座も本当はアキラがなるはずだった。腕は俺のほうがあると思うのだが・・・そうであってほしいのだがサッカー部の人気も上がるということで先生まで賛成しだした。でもおれがなった。あいつが断ったからだ。

『僕には部長という重大な役割を果たす自身がありません。ユウタ君は責任感もあり、サッカーの腕もあります。僕は彼にぜひ部長をやってもらいたいです。』

さすがに先生も断れず、俺がひきうけた。その結果がこれだよ。アキラがなっていたらどんなに良かったか。

「全員出席しているかは自分の目で確かめてください？部長でしょ。」

そしてアキラも俺のことはあまり好きではないらしい。お互い様というわけだ。

「わかった。」

じゃあ・・・なんで俺を部長に推薦したんだろう。

あいつを見るたびに疑問に思っている。

「1, 2・・・。」

人数を数え始めた俺はふいに言葉が詰まった。

「なあ、誰が・・・いないんだ？何人が亡くなったんだ？」

そう、数えたくても数えられなかった。

「全42名中17人が死にました。だから25人です。」

「そうか・・・ありがとう。」

俺はまた数え始める。どうやら五人ほど居ないようだった。どうやら一年生が多いみたいだな。あとで探さないと・・・。

「じゃあ。」

すぐにでも離れたかった。

「おい、部長なら少しは参加したらどうだ？」

そんな俺の気持ちを察したようにあいつが呼び止める。

「部員のことも把握できないで部長を気取るなよ！」

・・・一番気にしていることだった。部長としてダメだということ

は分かっていたから。

じゃあ何で・・・。

「だったら何で俺を部長になんか推薦したんだよ!!」
言ってしまった。言うまいとしていたことを。

「それは・・・。」

アキラはうつむき、俺から目をそらしているようだった。そして前を向き、俺をにらみつける。

「あの時の僕は・・・どうかしていたんです。」

あいつが発したことはそんなことだった。

「・・・わかった・・・。」

そして俺はあいつから離れていった。そんな俺のつま先に、サッカーボールが転がってくる。

「先輩!とってください!」

後輩の声が聞こえた。

でも俺はそんなことを無視してサッカーボールを蹴り、コートの中へ入っていき、ゴールの近くへ行き、ボールをそこめがけて蹴った。全てのイライラをぶつけて。

ボールはキーパーの手をすり抜けてゴールへと入っていった。周りのやつらは啞然としていたが俺はそんなこと気にせずさっさと次へ向かった。

ラグビー部である。

「カズヤ・・・っていないじゃん!」

ラグビー部の練習場所。いつもはカズヤが手を振って俺を迎えてくれる。だが今は肝心のカズヤが居ない。

「えっと・・・カズヤは?」

俺はそこらへんにいた生徒に話しかける。

「えっと・・・ユウタ先輩!!」

ああ・・・後輩だったか・・・。いちいち敬語はめんどくさいよな。

「それで・・・カズヤ知らない?」

「部長ですか・・・。」

後輩が視線をそらす。どうやら何かあったようだ。

「部長、来なかったんですけど……。だから俺たちが様子見にいったらひとしきり怖いとか嫌だとか叫んだあと見失ってしまっ……」

一人目はカズヤ……。か。

「じゃあ、どこに行ったかは知らないんだな？」

「はい……」

「ふーん。カズヤ以外は居るのか？」

「はい。全員……。いや部長以外はいます。」

「そっか。ありがとう。」

カズヤらしいといえそうだけど今部長が居ないと困る。部長は結構頼りにされているものだから……。そうだ。俺も部長だった。俺だって……。何も言えないのか。

そして俺は運動場を去った。

校舎に戻り、二階のトイレへと向かう。鍵はどこもかかっていないが念のため全部の扉を開ける。

「……。やっぱ居ないか……」

俺はそういいながらも最後に掃除道具入れの扉をあけた。

「カズヤみつけ。」

「ユ……。ユウタ……」

小学生のころ一時期かくれんぼが俺の学校ではやった。そのときのカズヤの隠れ場所のほとんどはトイレの中だった。校庭で遊んでいるくせにトイレの中。もはや反則だが見つけやすいから何も言わなかった。そしてリクやアユミやケンたちとで笑いながら探しに行っていたのはなぜかすぐ覚えていることだ。

「お前……。小学生から少しは成長しろよ……」

「したよ！背は三十センチ以上伸びたし体重は倍ぐらいに……」

「じゃなくて……」

俺はため息をつきながらカズヤをトイレから引っ張り出す。

「や、やめてよ！隠れてないと死んじゃうよ！」

「死なない！むしろ隠れているほうが水分不足とかそこらへんで死にやすいと思うぞ？」

「いやだ！僕は戦わない！」

カズヤは激しく抵抗する。俺も負けじと引っ張り出そうとするがさすがに体重の差にはかなわない。

「戦わなくていい。せめてでて来い。」

「いやだ！」

「みんな戦おうとしているんだ。お前だけ逃げるなよ！」

カズヤはしばらく黙り込む。俺も引っ張ることはやめた。

無理やり連れ出しても何も変わらない気がしたから。

そしてカズヤはゆっくりと今まで聴いたこともないような低い声で見つめた。無さげな鋭い目で俺を見つめながら言った。

「ユウタのせいじゃないか。ユウタが僕らをこんな目にあわせたんだろ！」

俺は目を丸くするしかなかった。カズヤから、いや俺の友達からこんなことを言われるなんて正直言って動揺どころの騒ぎではなかった。

くそ・・・何もいえないじゃないか。

「ここから離れて。僕のことには気にしないで。」

俺は素直にカズヤに従った。心臓がドキドキしている。今にも泣きそうだった。

それでも任務とやらはこなさなければいけないらしい。たまたまつけたアニメでやっていた。

・・・次は・・・文化部だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6846g/>

学校戦争

2010年12月26日02時27分発行